

サイボーグがダンジョンに出現するのは何故か

貴志部 矢賀

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

闘争しか知らない男は国の英雄となって死んでいった。

人の命が二束三文にしかならない世界で生きた男は国のために死んでいった。家族のいなかった孤児である彼らにとって、家族とは国であった。では死んだ今はどうなのだろうか？

化け物を殺すのはヒトが運命だと嗤う少女と自らは兵士だと断じて敵を塵殺する少女は炉の女神と英雄の器となる白兔と共に歩むはどうなるか。彼女は狂う、狂っている。笑って死ぬるが務めだと敵にまっしぐらに突撃する。

何故恐れる？何故躊躇う？ヒトがヒトを殺すは常識だろう。ヒトが化け物を殺すのは当たり前だろう。化け物にヒトを殺す権利はない。義務はない。殺したとしても輪廻し、別の自分が敵を殺す。ヒトにのみ、殺す権利があるのだ。

ダンジョンに愉悦を求めるのは間違っていないだろうか？なあ、最凶最悪の龍よ。

タイトル変更致しました。

目次

プロローグ	1
出立の日	5
白兔と二人と一柱の少女	10
幼女会談、その後登録	16
生きる為	21
死への恐怖	26
万能な魔力さん	32
最悪の道へ	38
彼の理想	45
義体《からだ》	51
怪物祭 狼	56
怪物祭 不死	62
夜の闇	69
サポーター	75
導き	80
美味しいものを食べる	86
自己満足	91
お風呂	96
第19話	102
中層で力を示す	108
リリルカ改造計画	112

プロローグ

彼の生まれた時代は核融合が実用化されたくらいである。裏社会の人間ならば誰でも知っている【ソリッド・スネーク】や【ジャック・ザ・リップパー】などの伝説となった人物たち。そんな彼らを知ることになるのは彼がとある人物に出会ったあとのことだった。彼は少年兵であったのだ。時代に似合わない、ガンパウダーを用いた明らかかな時代遅れの兵隊。その中で必然的にPMCの兵士に倒されていくのが道理であったのだ。少年兵たちのほとんどは保護されて生き延びた。彼も同じくであったが仲間たちとは違う道を選ぶことになる。彼が拾われたのは【アリス】と呼ばれるPMCSであった。その社長である【アリス】に息子同然に育てられた。彼は伝説ほどではなかったものの、ガンパウダーの投与によって残酷性も上がった彼は内勤で兵士でも活躍できる程度に育てられた。その頃にはサイボーグ技術も発展し、手術にはジャック、いや雷電の時代のように金がかかるわけではなかった。

しかし、彼の要求は通らなかった。アリスが断固としてそれを通そうとしなかったのだ。それに一旦は諦めて内勤を務めあげていた。現地コーディネーターも務めていたが数回やったあとのことだ、突然の襲撃だった。その任務には社長であり、会社の最高戦力である軍用サイボーグに身を変えた【アリス】も同伴していた。それだけでは捌けない敵だったのだろう、彼は生きていただけでも奇跡だったと言われ【アリス】には泣かれた。それを機に彼の身体はサイボーグへと変わり、現地任務にも身を捧げるようになったのだ。同僚や後輩に連れられて日本やドイツ、フランスに行ったが日本に行ったのを皮切りに食に目覚めた。まあ、そんなことは関係ないだろう。兵士の死ぬ瞬間は呆気ないものである。ましてや英雄でもなければ当然だ。幸いであったのはサイボーグは痛みを感じないこと、そして無駄に頑丈なことであった。同僚の助けになれたならそれでいい、殉死というものだ。決して無駄死にはないことを祈るのみである。

「ぬう、ハハハは？」

死んだことなど今の状況には些細なことだろう。死んだはずであるのにマップデータも何も無い場所に放り出されたことの方が重要である。

ガシヤン、と眼帯のような機能を果たすバイザーを展開する。今の状況を確認しなければ、と今までのデータを閲覧し、このマップデータやここに関するデータがないことを確認する。

「え、なにもないのか。まさかつ、記憶データは、ないっ!」

臆げではあるが今までの記憶もサイボーグ化してからの記憶も保持し続けてはいる。しかし、記憶データはおろか今まで保存し続けてきたデータすら存在していない。当然だがこのマップデータもまた存在していないのだ。

「マジかよ、完全なノーデータか」

探索ゲームによくあるマップピングをしなければならぬ、ということだろうか。基礎データは作っておいて損は無い。なので適当な大きさのマップデータを作成しておく。

背中には磁力でくつつく万能鞘とそれに収まる日本刀を高周波で強化した高周波ブレードがある。これが彼のメイン武装である。それを抜いてみてブレードを振ってみる。

「うん、いい感じだ」

死ぬ前に持っていたブレードと同じものであるようだ。満足すると鞘にブレードを収める。

敵をAR《拡張現実》として視覚化する「オーグメントモード」を使用して洞窟のような場所を進む。全力疾走すると地面に足跡がつくほどにパワーのある義体で進んでいくと何故だか壁から生まれる怪物がその余波で自動的に死んでいく。そんな中、ARとして彼の視界にあるのは壁で隔てられた向こうの世界。そこに見えるのは人間らしく見える者がさつきまで軽く殺していた怪物に囲まれている。戦おうとしているし勝てそうであるが恩は売っておいて損は無いだろう。

彼が見たのは少年であった。右手に逆手でナイフを構え、小鬼のような怪物の攻撃を避けると喉を裂いた。うん、簡単に倒せるだろう

な。

「ふんっ」

三体いる小鬼のうち、二体を少年が、飛び入りした彼が一体を処理する。

「邪魔をしたかな？」

「え、えっと。いえ邪魔ではない、です！」

「そうか、それは良かった」

人が人なら横取りしやがって、なんて言われていた場面だろう。この少年は優しいようで安心した。サイボーグになっても通用した読心はここでも通用するようだ。

「聞きたいことがあるのだが、ここはどこだ？」

「え？ダンジョン、ですけど」

「ダンジョン、ね」

少年の目が阿呆を見る目になっていることを予測してむう、と唸る。確かに転移する方法があったとしても今いる場所が分からないなんて阿呆は考えられないだろう。

「あなたは、」

「少年、すまないが私については今は聞かないでくれ。外はどこに行ったら行けるんだ？」

「あ、ごめんなさい。僕はもう帰るところなので送り返しましょうか？」

「ああ、助かるよ」

少年の名前はベル・クラネルであるらしい。自分の名前も名乗ろうとは思ったが今の姿が分からないことがネックなのだ。手の大きさ、自身の容姿データから元の姿ではないどころか関わりの深い人物になっている可能性すらあるのだ。

地上にたどりついた後の施設の中のシャワー室なる場所、そこに案内されてそこで自分の身体をまじまじと見る。

「んう、やっぱりか」

彼の身体は彼の母親同然の存在のものであった。顔もまたそれである。

「私は紫桜和平。アリス。どちらか、いやどちらにも、だな」

腰にまで届く黒髪と青い瞳、義体特有の服を着ていない状態の全身鎧のような見た目。そして何よりも幼女並の身長と容姿。予測はしていたがくるものはある。

しかしそんなことを気にしてもいられない。シャワー室を出ていくとベルに改めて自己紹介をすることにする。

出立の日

田舎の農村。二階建ての一軒家の裏で白髪のヒューマンの少年に相対するのは金髪の小人族の少女。少年は左手にナイフを構え、露出された右腕には何らかの紋様が刻まれている。少女は腰に二本の刀を差して、その内の一本を抜いて脱力している。少女は少年に稽古をつけるべく外に連れ出した。少年の祖父には許可をもらった上で、だ。

「……来い」

掠れた声が少女の口から出る。その言葉が少年を動かす。愚直な突撃、幼い少年は深紅の目に少女の空虚な瞳と刀を見据える。少女は突撃を素直に受け流し、体勢が崩れたところを蹴り飛ばす。何度も、されてきたことだ。今更叫び声をあげることはない。

次も愚直な突撃だ。それも簡単に捌かれる。だが、その次の蹴りを少年は避けた。

「ふむ」

そして少年は浮いた自分の体を地面につけてナイフを振りかざす。それも簡単に掴まれ、再び蹴り飛ばされる。何十回も何百回も繰り返されてきたこの鍛錬。少年の身体に染み付いている。

朝は少女が少年を蹴つとぼすことから始まる。体に染み込まれた痛みと技は裏切らないと五つの頃から毎朝の日課となっている訓練である。それが終わると少年の祖父と共に農作業に移る。時期によつては植えや収穫もあるが、全て終わったあとに訓練が再開される。

「さて、今度は魔術の基礎だ」

「え、基本型なら大体は覚えてますけど」

「慢心はいかんど、ベル」

「分かりましたよ、クオンさん」

クオンという幼女の講義は有意義なものである。何年生きているかも分からない彼女の知識は祖父をも遥かに超えていた。彼女の持っていた【魔力応用術】という古文書と彼女の正しい知識、そして最大は彼女の教え上手なところであるだろう。彼女がこの家を訪れ

たのが五年前。本格的にベルに稽古をつけ始めたのが四年半前。それで覚えたのは基礎編である【基本型】を殆ど。しかしクオンとの鍛錬では至れないのが【応用型】やその先。そろそろかねえ、とクオンは思うとベルを寝かせる。

「洋酒は好かない」

「そう言うな、晩酌にくらいは付き合ってくれ」

机に置かれた安物の洋酒。木造のコップに老人によって注がれ、小人族に差し出される。

「ベルはどうじゃ？クオン」

「ん、強くなってる。魔術はもうすぐで使えるようになるな」

クオンと呼ばれた小人族が刻んだ右腕の紋様。超常的なもので魔力の大幅な増強と魔力で生み出した腕を作り出すことなど、様々なことが可能になる。実に多機能で魔力を用いたことなら結構応用が利く。しかも、クオンが作った魔力を使用した技術【魔術】を使えるように補助してくれる。クオンの正体が分からなくなる一因である。

「そろそろ、かのお」

「そうだな。もうあいつも十二だ。そろそろ外を知ってもいいだろう」

老人は寂しそうに唸る。小人族はそれをみてため息が出る。

「ゼウス」

「ん、なんじゃ？」

「旅に出ても修行は継続する。つまり私が同行するんだ、安全だろう」
「それは分かつとる。でもなあ、心配なんじゃよ。子供のいない創造主様には分からんか？」

「煽られるのは得意じゃない」

クオンにとつて、子供がいないのは地雷だったようである。一瞬、老人に殺気が向けられ、老人は呼吸ができなくなり、解かれる。

「止めてくれ。ヘラよりキツイ」

「浮気性の阿呆が」

クオンは一筋なのだ。浮気性が許せない。しかしながらそれ以外は確かに、尊敬できる老人だ。たまたま会ったのは本当に偶然だった

のだ。かの竜に敗北した老神と直接手を下せない者、新たな英雄を生み出すことが決まるのにさほど時間はかからなかった。

「さて、明日には出ることにしよう」

「いきなりじゃなあ」

「三年後には元服。それまでには一人前にしたい」

「お主でもそんなにかかるのか」

「当然だろう」

人の成長に必要なのは試練だ。ベルの場合、悪意に晒され、強敵を討ち滅ぼす。そんなありふれた英雄譚が一番似合うだろう。それに比べればクオンの施す修行などその下準備でしかない。

「お前の目的は黒竜を倒す英雄だろうか？」

「そうじゃあ、ベルがそれを成してくれるのなら僕は満足じゃ。でもなあ、今は好きに生きて欲しいと思うんじやよ」

「人の生き様は神の想像なぞ軽々と超えていくもんだ。あいつの因果と意思が決めること、私たちが決めることじゃない。そろそろ寝たらどうだ」

「む、そうするかの」

老人も二階に上がっていく。小人族は深くソファに体を沈み込ませ、目を閉じる。

翌朝、ベルは祖父が起きる前にクオンに起こされた。

「出るぞ」

「えっ？」

クオンの言葉にベルは当然の如く動揺する。クオンにいつも聞かされてきた、いつかは旅に出る。その時なのだろう、と幼心に理解はできた。

「あの爺さんには夜に話した。お前が嫌ならいいが、どうする？」

「行く！寂しいけど」

「そうか。じゃあさっさと準備しろ」

「あ、うん」

ベルは寝間着をクオンの用意した服に着替え、ナイフを取り出して腰に差して外に向かう。

「行くんじゃないな」

扉を開けると目の前に祖父がいた。祝うべきか、止めるべきか、孫の姿を見る。

「おじいちゃん……」

「胸を張れ、強くなれ。クオンを守るほどにな。これが最後じゃないんじゃない、しっかり成長して帰ってこい」

ポン、とベルの頭に手を置く。目を丸くさせ祖父を見る。祖父は祖父らしく、豪快な笑みをたたえてベルを見ている。

「……うん！」

それに影響されてかベルも笑顔になり、外に飛び出していく。

「いいもんじゃなア、次が楽しみじゃのう」

老神は自分の孫のこれからを思い描く。きつとこれとは違う人生を送っていくことだろう。

寂しくなるが、ベルの姿を夢想するのが日課になっていくことだろう。ベルの姿を見送ると寝室に戻っていく。

村の外れにあるベル・クラネルとその祖父の家。その同居人のクオンは小人族の中でも小さいと言える彼女と同じくらいのリユックサックを傍に控え、ベルを待っている。

「遅かったな」

「おじいちゃんに話しててっ、ごめん」

「別にいい。それより渡すものがあるからな」

腰まで伸びる髪の毛の中程からベルの腕より一回り大きい、腕つぽいものを取り出してベルに渡す。ベルの腕くらいなら全て覆い尽く

せるくらいで、鋼鉄でできているらしいものだ。

「義手？」

「正確には違う。右腕に着けてみる」

言われた通りに肘まで袖を捲りあげて装着する。大まかにセットし終わると起動音がした後、スカスカで腕の紋様が丸見えだったのが完全に元の腕が見えないようにびっちり装着される。

「魔力起動式手甲の試作型だ。腕の紋様は見えちゃ不味いからな、義手の方が体裁はとれる」

「へえ、そうなんです、か？」

「よく分かっていないのか。まあ機能はこれから教えていくとするかな」

行くぞ、とクオンは巨大なりユックサクを背負い、着いてくることを促す。ベルはそれに一瞬面食らい、すぐに平静を取り戻して追いかけていく。

白兔と二人と一柱の幼女

和平のいた国には明確な「英雄」はいなかった。戦争に行つて死んだ、サイボーグになった、戦争に関する事で何か発明をした。ただそれだけで英雄に祭り上げられた。

そんな国でも和平は悪い気はしていなかった。幼い頃からそれが常識になつていたのである。政治家や自分のいた孤児院の院長は彼の尊敬の対象であつた。

非戦闘型サイボーグ初期試作型「アリス」

元の名前は違つたらしい。しかし、もうその名前は捨てたのだという。その姿は自身の性癖によるものだったようで、幼女の姿だった。いつでも微笑みを絶やさず、子供たちにもいつも優しくかつた。みんな、私の子供だといつもそう言つてくれた。サイボーグ技術も彼女によるものだ。手足を失つた者のために研究を続けていた。最初のサイボーグ手術は彼女だった。彼女自身の志願だったらしい。孤児院の院長も自身の志願、全てにおいて彼女は人格者だった。だからこそ、和平は尊敬していたのだ。

なぜ、突然「アリス」の説明をしたのか、疑問に思うだろうか。単純な話だ。戦闘型にモデルチェンジした「アリス」に変わつていたのである。顔は完全に慣れ親しんだ院長であつた。

【共通語《コイナー》】という言葉がある。話を通じていたので油断していたが、言語が読めないし書けない、という問題に直面した。記憶喪失だということを通してあるので何かがあつたのだらう、とあらぬ誤解を受けてしまつていたような気もする。格好にも問題はあるだろうが、なにか服を買わない限り問題は解決できない。

ベルに着いていった時に出会つたエイナという女性。和平の目には郵便局にも市役所のようにも見えた内装の建物、そこに至るまでも至つた後も和平の見た目は目立っていた。小柄であるベルよりも小さく、腰まで届く長い白髪に青い瞳、首より下は全身鎧のように見える義体。ダンジョンから出たあとにバベルの施設でベル君に勧められてシャワールームに入った時に自分の姿を知つた。尊敬し、家族

として愛していた【アリス】の姿。顔は見慣れたもので、義体は大幅に改造され戦闘型となっている。それでも幼女としての形は保たれ、母性を抱かせ、その手の趣味を持つものには喜ばれるだろう。

「ベル、私の見た目とは珍しいのだろうか」

「え？珍しい、のかな」

「疑問形では困るのだが」

周りから見られるというのはいつまで経っても慣れないものである。

この世界には人間の間でも狼人や犬人、猫人にエルフなどなど、様々な人種がいるらしい。アリスの見た目はその中でも小人族にあたる。ハーフェルフの女性、エイナは和平を見て、度肝を抜かれたことだろう。その後の説明を聞く顔と顔を真っ赤にして怒られた。こちらの世界では恩恵を持たずにダンジョンに入ることは自殺行為になるらしい。上層なら恩恵なしでも踏破できるとは自信を持って言える。まあ、自ら縛りを設けるようなことはしない。容易に力が手に入るなら【ファミリア】に所属するべきだろう。

エイナにオラリオのことなど、この世界についての簡単な説明を受けた後、待合室で待たせていたベルの元に戻る。

「ベル」

「あ、アリス」

出ようか、と地図は貰ったが土地勘は相変わらずないのでベルに着いていく形となる。

【ファミリア】はもう既に決まっている。ベルには恩義があるし、ヘスティアといえれば全ての孤児たちの保護者と呼ばれる神だ。アリスと相性がいいと思われる。それにこれといった黒歴史もないと思われる神だ。引きこもりとも思われるが無難な神であることには変わらないだろう。

「本当にいいんですか？団員が僕一人しかない零細派閥になんて……」

「君には恩義がある。エイナにも頼まれてしまったしな」

それにヘタなところに入って面倒事に巻き込まれるのは勘弁願

たい。

路地裏を抜けると真っ直ぐに見えるのは廃教会。

「あれが本拠なんですけど」

申し訳なきような顔をするベル。整備されておらずとても住めそうにないが他に居住スペースがあるのだろうか。

「ふむ、居住スペースは地下か」

「えっ、なんで分かったんですか？」

「そうとしか考えられないからな」

教会の中は、放棄された建物という評価が丁度いいだろうか。祭壇の傍に地下への入口がある。ベルに案内され、地下室に入っていく。

「おっかえりー！」

「おかえり」

肉の弾丸が飛んできて、ベルに直撃する。その正体は女神ヘステイアなのだろう。特徴は長いツインテールに大きい胸、それに似合わない小さい体躯。俗にいうロリ巨乳というものだろうか。その奥にはソファにて小さくベルにおかえりを言った幼女。精神年齢はその体に見合ったものではないだろう。

「ちよ、神様離れてくださいっ！」

「もうちよっといいいじやないかー。……ん？その子は誰だい？」

「入団希望者ですよっ！」

「そうなのかい!?これは失礼したね、ボクが【ヘステイア・ファミリア】主神のヘステイアさ。君は？」

「紫桜和平と申します、ヘステイア様」

「和平方だね、ようし【ヘステイア・ファミリア】によう」

「ちよっと待て」

「クオン君？」

ヘステイアの後ろから現れたさつきまでソファに座っていた幼女。クオンはヘステイアに退いてもらった後、アリスの目を数秒間見つめる。

「ふむ」

「クオンさん？」

「ん、私は賛成だ」

飯でも作ってやる、と言い残して台所に入っていく。それを見て、ヘスティアとベルは気まずそうに

「それじゃあ和平君に恩恵を刻もうかな。ほら、ベル君は去った」

「あー、はい！」

ベルは逃げるように階段を駆け上り、ヘスティアはアリスをベッドに促す。

「じゃあその鎧を脱いでもらえるかな？」

「え？」

アリスは疑問符を抱く。自分は鎧なぞ着ていないのだから。

「いやだからその鎧を」

「鎧なんて着ていないのだが」

「着てるじゃないか、これだよこれ」

こんこんとアリスの義体を叩くヘスティア。それで初めてああ、と納得する。

「これが私の義体《からだ》だよ、ヘスティア様」

「え？嘘だろ、嘘だよ？あれ、これどうすればいいんだろ、え？」

クオン君、クオンくん!!と台所に助けを求めに行ったヘスティアを見送りベッドに腰掛ける。

「奇怪なものなのだなあ」

鉄（物理的に）の幼女は自分の体を眺めてため息をつく。

クオンに助力を頼み、なんとか恩恵は授かることに成功した。結果的に義体の背中に血を垂らしたら成功したのでラッキー、といったところだろうか。だが、これでは日常生活に支障が出る。恩恵を授かることよって発現する「スティタス」は他人に見られるのは致命的なのだという。奥の手も見られてしまう、ということなので避けた方がいいのだろう。ということでもクオンに教わりながらスティタスの露出を防ぐ【錠《ロック》】をかけてもらう。だがまあ服は買っておいた

方が良いだろう。神の行える技を知っているとは、クオンとは何者なのだろうか。

「ふう、これが君のステイタスだよ」

「ありがとうございます、へステイア様」

「……はあ、料理に戻る」

大騒ぎした後、クオンは台所に戻り、へステイアはソファに寝っ転がる。そしてアリスは自分の「ステイタス」を見る。

紫桜 和平

L v 1

「力」 I 0

「耐久」 I 0

「敏捷」 I 0

「器用」 I 0

「魔力」 I 0

魔法

【召喚 人斬り】 召喚魔法。過去に見た武器や兵器を召喚する。

詠唱式【来たれ《名称》】

スキル

【至高の少女《アリス》】 早熟する。自身の義体と高周波ブレードを常に最高の状態に保つ。

【機械兵士】 人型と大型の敵と戦う時、ステイタス超高補正。痛みや恐怖などの感情を抑制可能。

「魔法が一つにスキルが二つ。異常だよ、君」

へステイアがソファからアリスに呼びかける。

「特にアリスってスキル。それは誰にも言っちゃダメだよ。いいね？」

「了解した」

神々は娯楽に飢えている。零細派閥に所属するレアスキルもちなど知られては引き抜かれてしまうかもしれない、ということだろう。

「魔法は、今試すかい？」

「いや、まだいいだろう。今はそれよりベル君のステイタス更新が先

だと思われる」

「忘れてた、ベルくん！もういいよー！」

ヘスティアがベルに呼びかける。更新には同じことをするのだろう、とベッドを腰かけるのをやめて、適当な丸椅子に座る。

「ああ、ヘスティア様」

「なんだい？」

「普段、私のことはアリスと呼んで欲しい。事情はベル君が寝た後に話そう」

「んー？分かったよ、アリス君」

純真無垢なヘスティアの笑顔は癒されるものだ。ベルが戻ってくると少し暴走するのは苦笑する他ないが、仲良くやっているようで安心する。

しかし、団員は一人だとベルは言っていた。ならばあのクオンという人物はなんなのだろう。ベルが嘘を言っているとは思えないのでただの居候なのだろうか。

幼女会談、その後登録

夜も更け、真上に満月が見える時間帯。ヘステイアと和平が話をしようとした時にクオンが乱入し、強制的に屋外に連れ出された。ヘステイアとクオンの向かいにアリスが座っている状態だ。座っているものは小さい丸椅子である。クオンは酒瓶片手に和平を見守っている。

「さて、話ってなんだい？」

ヘステイアは真っ直ぐに微笑んで和平に問いかける。女神らしく、包容してくれるような感じだ。

「何と言えればいいんでしょうか」

頭の中で言葉がまとまらない。何から話していいものかと混乱しているかのようだが、酷く冷静にその状況をまとめていた。

「私は、既に死んでいる」

「・・・どういふことだい？」

嘘を言っていないのだから、ヘステイアは目を細める。死んでいるのなら今ここにいる訳がない、しかし死んでいるという言葉に嘘はなかった。

「私にもよく分からない。でも目覚めた時にはこの体でダンジョンに放り出されたんだ」

「転生ってやつか」

心当たりがあるように、和平が思い浮かべていた言葉をクオンが吐き出した。異世界転生、というジャンルは和平のいた国でも昔流行したジャンルである。古い本を引っ張り出しているときに読んだことがある。まだ義体ではなかった頃のことだ。

「知っているのか？」

「確か、死んだ人間の魂を別の体に憑依させて異世界に放り込むんだよ。お前、元の体は？」

「男だ。体はこの体の男で倍大きい版だな。年齢は四十三だ」

「その体との関係性は？」

「義体が非戦闘型から戦闘型に変わってはいるが私の母同然の存在

だ。孤児院の院長で、名前はアリス」

「年齢は？」

「知らない。話してくれなかった」

「そうか。だからアリスと呼んでほしいと。らしいぞ、ヘスティア」

クオンがヘスティアに話を振る。

「えっと、分かったよアリス君。とりあえず君の体はここには過ぎたものだ。それは全身鎧ってことにした方がいい」

「やっぱり、そうなのだろう。冒険者という仕事で腕や足、体の一部を欠損しそうな仕事をしているのに義手や義足をしている冒険者らしき人を一人も見なかった。」

「そうだなあ。明日は冒険者登録くらいしか用事はないよらな。ヘスティア、お前こいつに付き添ってやったらどうだ？」

「いや、バイトがあるし」

「私が明日休みだ。だから私が代わりに行ってやろう」

クオンはなかなか気が回るようだ。零細派閥で新規団員を押しとどめようとするのは当然の考えであるが、感謝はしなければならぬだろう。

「ありがとう、クオン。そういえばベル君とはどんな関係なんだ？」

「義理の親つてところだ。ファミリアには入らないが、面倒は見る」

「そうか」

和平にとつてのアリスのような存在、といったところなのだろう。アリスも非戦闘型で戦闘はしなかった。今の義体では戦闘できてしまいが、精神が平和なので問題はないと思う。

「もう遅いし、寝ようぜ」

眠くなってきたよ、とヘスティアが発言する。そうだな、とクオンが同意したが、アリスがどこで寝るかという話題に移る。正直、食事さえとっていれば眠りは必要ないのだが、精神的な療養的な意味もある、とクオンに諭された。取り敢えず、今日のところは簡単な折り畳み式のベッドを使用することになった。

翌朝、目が覚めたのは誰かが足音によるものだった。元々眠りが浅かったのもあり、お目目ぱっちりの健やかな目覚めである。

「……………むう」

台所から小さく声が聞こえる。ヘステイアとベルは目に入るため、クオンであろう。料理ならばアリスの得手である。

「む、起きたのか」

「ああ、何を作っているんだ？」

「ベーコンエッグだ。朝だからな、簡単なものだよ」

「そうか」

クオンは既に調理を終えて料理はさらに盛り付けられている。少しおかしい、早くないだろうか。

「早すぎないか？」

「何がだ」

「料理だよ。足音がしてすぐ来たのだが」

起こさないように注意はしていたようだが、聴き逃しはしていない。見てはいないが人が歩いていたのはわかる。

「簡単なものだからなあ、早く終わるものだよ」

「いや、それにしても早すぎると思うが、まあいいか」

今は一旦、クオンについて考えるのはよそう。クオンは様々なことを知りすぎている。何もかもをできる可能性もあるのだ。

「私に手伝えることは無いか？」

「あー、二人を起こしてきてくれ。私はこれを持っていく」

「分かった」

クオンは器用にベーコンエッグの乗った皿を四枚持って居間に持っていく。

「起きろー！朝餉だぞー！」

二言でベル君は容易に起きる。一言二言言葉を紡ぎ、丸椅子を運んでテーブルの前に座る。まだ起きないヘステイアを無理矢理起こした後、朝ご飯に入る。

食べた後、クオンはバイトに、ベルはダンジョンへと出かけていく。

今の時間帯は8時ごろだろうか。世の中の労働者が仕事を始めている頃だろう。

「じゃあ行くこうか」

「ああ」

本拠から出ると真っ直ぐにギルド本部に向かわず、服飾店に向かうようであった。

「どこに行くんだ？」

「小人族用の服屋だよ。クオン君からお金、受け取ってるからね。服用の」

「そうなのか、有難いな」

クオンは優しいのだな、と帰ったら感謝の言葉を伝えなければと思いい、ヘスティアに着いていく。

服飾店にて服を購入後、外に出る時にはアリスの体は完全に義体は隠れてはいないものの、首元や足首より下以外は露出していない姿に変わる。前方にいるヘスティアはふんす、とドヤ顔をしている。

「落ち着かないな」

体が和平であった時もほとんどは義体のままで過ごしていた。服を着るなど、常識であるという認識も持っていた。義体を取り替えればお洒落も可能だったため、服を着ることは僅かではあるがあつただが。

「あ、アリスちゃん」

「エイナ、昨日ぶりだな」

ギルドに到着すると、自然とエイナの姿を探し受付にいたので真っ直ぐにエイナの元に行った。ヘスティアはもう居ない。ヘファイストスという神に用があるようで、バベルに行った。

「ファミリアには所属したの？」

「ああ、提案通りに「ヘスティア・ファミリア」に入ったよ」

「今から資料持ってくるから待っててね」

資料、というのは冒険者登録に必要な物だろう。大人しく待っていると資料を持ってエイナが戻ってくる。

「これに書き込んでね」

差し出された書類には登録に必要な事項が書かれているのだろう。

「……ぬう」

読めない。つい昨日、分かっていたことなのにまたこの問題に直面してしまった。幸い、英語に似ているので予測はできる。それでステイタスは乗り切っている。いや、ここでも乗り切れるだろうか。とりあえず英語で記入してみよう。

「そういうえば、アリスちゃんって読み書きが、って書けてる」

「似た言語だったので」

英語と共通語は似ている。共通語の字は英語の崩れたバージョン、といった感じだろうか。アリスが共通語に抱いた印象がこれである。

「しかし、【共通語】は学べないのだろうか」

「ならこの後の講習で一緒にやる?」

「……いいのか?」

言語といえれば重要なものだ。世界から人の集まるオラリオで言語が重視され、学べるのは当然ではあるが金銭は取られないのだろうか。

「その辺は大丈夫よ。ここでのサービスは基本無料だから」

「そうなのか、なら遠慮なく受けよう。書類はこれでいいのか?」

「読めるから大丈夫。じゃあ個室に行きましようか」

どうやら講習はエイナがやってくれるようだ。昨日の話しぶりから、彼女の講習はわかりやすいのだろう、楽しみである。

生きる為

完璧である。ダンジョン講習は早くに終わった。和平自身、自分を高めることは大好きだ。勉強もその中に入る。それに元々頭の回転が速く、そのおかげで大体のことはすぐに覚えた。なので次のステップ、【共通語】の学習に移る。それも簡単であった。元の世界の大体の言語が頭の中に入っている和平にとって、他の言語との類似点を見つけてすることはそう難しくなかったのだ。それでも1から学ぶのは大変で、楽しいものだった。エイナの教育方針は和平にとって心地の良いもので、柄でもなく義体の指が軽快に進んだ。

「ふう、まさか一日で全部覚えるとは思わなかったわ」

個室に設置されている小さな丸窓には外から赤い光が差し込む。もう夕方であるようだ。エイナは疲れたようにソファに座り込むが、どこか満足しているように見える。アリスは途中の休憩もあってか義体の出力はまだ余裕がある。和平的にもまだ余裕だ、頭はまだ回せる。

「大丈夫だったのか？ 私に一日付き合わせてしまつて」

「大丈夫よ。これも仕事の内だし」

勉強していた時にも話していたが、エイナの方針は不人気であるようであった。それで久しぶりに生き生きと自分の授業を聞いてくれる、年下っぽいアリスの存在は大きいのだろう。

「それじゃあ、そろそろベル君が帰ってくるわね。なら、一応もう一度書いてくれる？」

アリスの前に出されたのは朝に一度見た冒険者登録用の紙だ。早速覚えた【共通語】をそこに書き込んでいく。必須事項が少なく、殆どが任意のものとなっている。とりあえず書けるものは書いていくことにした。

名前は紫桜和平、年齢は四十三歳。Lvは1で所属ファミリアは【ヘスティアファミリア】出身地は、まあ書けるところではないのである。特筆するスキルや魔法は、書くべきものではない。必須事項は名前と所属ファミリアだけだったので問題ないだろう。

「書いたぞ」

「ありがと、ギルドは紫桜和平氏を正式な冒険者として認めます。
……ん？」

エイナは形式的な言葉を読み上げると登録書類の中の年齢の項目に目を奪われている。どうしたのだろうか、と呼びかけようとする瞬間、アリスを見る。

「アリスちゃんって四十三歳なの？」

「ああ、そうだ」

アリスの年齢は分からないものの、和平の年齢は確実に四十三である。姿とのギャップに苦しんでいるのだろう。

——……ふむ、しかし急に態度を変えられると困るな。

「年上かあ、なら言葉遣い変えた方がいい？」

「結構だ。自然体で接してくれたまえ」

アリスの返答にまだ少し混乱しているようで、ベル君が帰ってくると思うからロビーで待ってて、と言い残して慌ただしく関係者専用出入口から出ていく。

「んう、ふう。明日からはまた闘争か」

リラックスして伸びをする。カチャカチャと金属音がするがその音がアリスにとってはもう慣れていて音で心地よいものだ。エイナの言葉に従って個室から出る。適当に待合用の椅子に座って周りを見渡すと受付にベルがいるのを見つける。

——大人しく待つかな。

ギルド内の設備でも適当に見つめながらベルを待つことにする。明日からはあの純情で、美しい少年とともにダンジョンを探索することになる。冒険者としては彼が先輩になるだろう。しかしそれ以外に関しては和平が遥かに先輩だ。年上として接すれば間違いないだろう。

「今日の探索はどうだった？」

「いつも通りですかねえ。焦っちゃダメのは分かってるんですけど」

そう言うベルの顔は不満そうだ。

「そうだな、焦ってはいけない。む、君は買い出しはして行かなくていいのか？」

歩いている内に市場が見えてきた。バイザーの機能の内に地図機能がある。それにギルドで買ったダンジョン上層の地図とオラリオ内の見取り図をインプットし、常にバイザーを展開すれば地図が見られるようになっていた。

「ああ、いつもクオンさんがやってくれてるので。僕はまだ料理できませんから」

「教わっているのか？」

まだ、というならいつかは出来るという意味にもとれる。クオンにでも教わっているのだろうか、と純粹に気になった。

「クオンさんに教わってますよ。冒険者ならダンジョン内でも自給自足しなければならん、だそうで」

的を得ている、と思った。ダンジョン内でいかなる事態に陥ったとしても生き残れる力は必要だ。モンスターは死ぬと灰になるようだが肉を食べるスキルでも獲得したら食糧を持ち込む必要が無くなる。合理主義である和平からしたら食えるものは何でも食うべきだ。

「できた方が便利だぞ。技は腐らないしな、そういえばその腕はどうしたんだ？」

この世界での義手の水準は分からない。どこから見ても義手であるベルの右腕を和平は気になっていた。自由に動かせるようだし、ダンジョンにも問題なく潜っている。

「これですか？帰ってから説明しますよ」

「そういうことか、分かった」

右腕に関しては極秘事項のようだ。それ以上は深く掘り下げないようにしてベルに今日の話を振る。ベルからも話を振ってきたので隠すべきことでもない今日の出来事は包み隠すことなく暴露していく。

廃教会よりの外れ、少し開けた草むら。そこで少し離れてクオンとアリスが準備体操をしていた。二人より離れたところで丸椅子に座ってベルとヘスティアは観戦するつもりの方である。

こうなつたのには理由がある。ベルが腕のことを話したあと、クオンが思い出したように言ったのだ。アリスの実力を測っておきたい、と。アリスがそれを了承するとベルの訓練のついでにクオンとアリスで模擬戦を行うことになつた。

という訳である。簡単な話、ベルを鍛える前にアリスの実力を測っておく、ということだ。クオンは木刀を、アリスは高周波ブレードを構える。

「本当にいいのか？木刀で」

「本当に危なくなつたら持ち変えるさ。お前のタイミングで来い」

奇しくもクオンとアリスの構えは同じであつた。どちらも腰を落とし、右手で持ち、左手は添えるだけで刀を持つ。顔と同じくらいの高さに刀をもつてくる、ジャックザリッパーの異名を持つサイボーグのような構え方である。

「では、お言葉に甘えて」

さながら電光石火の如く、一般人には消えたように見えたであろう動き。地面を蹴り、真つ直ぐにクオンに突撃する。蒼い雷を義体に纏い、突進力を利用した突きをクオンに見舞おうとする。

「なっ……!」

ガキンツと両手の突きは片手の木刀で防がれた。クオンは黙つたまま、ニヤケヅラをアリスに見せる。ならばっ、と手を刀から離す。クオンはそれを見ると正眼の構えに移行する。真つ直ぐに、虚ろな瞳をクオンはアリスに向ける。

「このっ!」

掌底、木刀で右に逸らされる。左手で刀を逆手で握り、腹に蹴りを、

「なにぃ……!?!」

肘で挟まれて止められた。おかしい、おかしすぎる。アリスの義体は戦闘型ならば2トントラック、いやそれよりも数倍大きい兵器です

ら投げ飛ばせるくらいの馬力は出るはずだ。蹴りでも絶大な威力を持つているはず、恩恵を貰ったならそれ以上の威力が期待できる。ならば力が籠ってなかった？義体になれてなかった？否だ、これでも和平はプロ、加減などしないし義体にも慣れたはずだ。

「スキありだな」

「ガアッ!？」

普通の体ならば心臓のある位置、義体なら核がある位置。そこにクオンによる突きがクリーンヒットする。アリスは弾き飛ばされて地面に転がる。

「結構な馬力だな。Lv5でもお前を止めるのには苦勞するだろうな。だが、私には無意味だ」

合格だ、と結果が言い渡される。当然、和平はそれに納得できなかった。しかし、納得せざるを得なかった。その後のベルの修行風景を見てのことだ。アリスの時より更に加減されているとはいえそれでも吐血し、体の各部から血が流れ出ている。それでも無限の如くに起きて、起きて、クオンに対抗しようとしている。

「満足、してたんだなあ」

ここではあの時のような探求はしてはならないと知った。そしてここではこの探求をせねばならないと知った。終わった後、クオンが回復薬を取りに行く時、ボロ雑巾のように転がっていたベルとアリス。

「どうだった？クオンさん」

「強すぎるな。だからこそ、超えたいと思うのだが」

「僕もだよ、アリス」

共に強くなろう、と二人で誓いあう。同じ目標ができたからだろうか、ベルと親密になれたような気がするのだ。

死への恐怖

運命、などというものがあるなら彼の運命は正しく悲惨であった。生まれはどこかの病院であったはずだがそんなことは覚えていない。アリスに拾われたのは都内の路地だったらしい。それから、馴染むには少し苦勞したが、それからは良い日々であった。十四の頃には生涯を共にする伴侶にも出会えた。二十の時、子供も産まれた。戦場での武者働きにもいつそう身が入った。しかし、三十の時だ。彼が帰ったのは昼だった。後輩はの訓練が早くに終わり、帰ってこれたのだ。彼がサイボーグ手術をしたのは二十三歳だった。息子は学校に行っており、妻は専業主婦だった。彼を迎え入れるのは愛する妻のハズだった。おかえり、と暖かい声を彼に与えてくれるはずだった。彼と最初に目が合ったのは、知らない男だった。不倫をしていたのか、まあそれならよく家を留守にする自分が悪いと割り切れた。戦場で嗅ぎなれた血の匂いを彼は感じ取った。

—今更思い出すことじゃないな。

思考をバツサリと切り捨てる。自分の姿がアリスということを加味するとベルが過去の自分だと思ってしまう。ベルは十四歳らしく、自分が妻と付き合い始めた年齢と同じだ。

「どうかした？アリス」

「いや、何でもない。さっさと行ってしまおう」

天高くそびえるバベル。流石に元の世界にあった宇宙に続くエレベーターが内蔵されている施設には高さは劣るものの、石造りなのが神代らしい。なんとなく、威厳を感じる気がする。そんな石造りの塔に入るベルとアリス、こころなしかベルのテンションが上がっている気がする。

ダンジョン一階層、全ての冒険者が最初に訪れる階層であり一喜一憂する階層だ。先輩と共に来るか一人で来るかは分からないが冒険者になったばかりの若者は心を踊らせることだろう。まあ、アリスは既に見ているため新鮮味も何も無いのだが。

「ベル君、君の到達階層はどこまでだ？」

はつきり言つてアリスはベルよりも強いだろう。ベルの腕に何かあるのは分かる。クオンとの修行の時に使っていた【魔力応用術】は冗談抜きに強いだろう。使っていたナイフの材質を強化したり、身体能力を強化したり、他にも無限にやれることがあるのだという。学ぼう、と思うには時間などかかろうはずがない。まあ、とりあえず今日は【アリス】の義体を試さなければならぬ。

「え？ 四階層ですけど」

「四階層、か。なら五階層にでも行つてみるか」

「えっ？」

【冒険者は冒険してはならない】昨日、エイナからしつこく言い聞かされた言葉だ。当然、ベルも同じくであろう。一昨日いたのは三階層であつたとしてそこでは恩恵無しでも余裕であつた。マップデータはしつかり残つており、ベルから受け取つた地図をデータに追加したところ、クオンが購入した地図は十二階層までで上層ならどこでも自分の位置が分かるようになっていた。アリスのマップデータによってどこにいても迷わないのはベルにとつてもありがたい話だろう。そんな状況を加味しての五階層行きだ。どんだんに降りていってもいいのだが、それではベルが死んでしまう。

「四階層までなら君も余裕そうだったし、エイナ殿も許していた。もちろん四階層までの探索も念入りにするが、今日中の五階層行きは大丈夫だろう、と判断するがどうだろうか」

もちろん経験者のベルに判断は一任する、とも言ひ加える。戦場での経験なら和平の方が多いが、モンスターとの戦闘はベルの方が多し、といつても誤差の範囲だろうか。それでもベルの方が先輩である。判断を仰ぐのは間違いではないだろう。

「アリスもいるし大丈夫、だね！」

「そうか。よし準備運動といこう」

アリスの両目をバイザーが覆う。そしてマップを閲覧できるように片目でマップデータを展開する。モンスター特有の何かを察知するものを埋め込められれば位置と生まれることをマップに赤点やらなんやらで追加もできるだろうが、期待はしない方がいいだろう。バ

イザーにはサーマルスコープなど、あらゆる機能が搭載されており、多少の障害物は無視して生体反応を探ることができる。それを【オーグメントモード】と呼んでいる。

はつきり言つて義体はこの世界にとって【オーパーツ】と呼べるものだろう。如何なる魔道具でもすべての機能を再現するには至らないだろう。そもそも【至高の幼女】がなくとも義体の耐久力は第一級の防具を軽々と超える。アリスの存在自体が地雷と呼べるだろう。そして自身の技巧も並ではない。

五階層までの道のりでベルの出番があつたかと言うと微妙であつた。ベルの手甲、【魔力起動式手甲】だったか、も索敵の機能はあるようだがベルがまだそれについていけないようだ。

「静かだね」

五階層に突入した直後、ベルが口を滑らせる。アリスはそれに小さくそうだな、と相槌を打ち注意を凝らす。確かに前の階層と比べると異様に静かだ。オーグメントモードを起動しても人も、モンスターもいないことが分かる。それに、モンスターが生まれない。

「これは、帰つた方がいいか」

「そうだね、これは異様だ」

決断は早い方がいい、とよく言うだろう。これは早かつたか遅かつたか。ベルの手甲が、アリスの耳が反応する。遅かつたのだろう。岩の破片、轟音、雄叫び。

「走れえつつ!!」

「分かつてますよっ!」

嫌な予感が、嫌な汗が全身を伝う。ベルは何とか【魔力応用術】でアリスの速度について行く。

『ヴモオオオオオツツ!!』

マップデータを閲覧、正しい道走つて上に上がるためだ。

「……………っ!」

「ベルッ!」

アリスには効かない。しかし、ベルには効いてしまった。【強制停止】、雄叫びからミノタウロスであることは暫定的に明らかであろう。

引っ搦んで、引きずってでも逃げる。

「チイツ」

馬力はあるものの、体は小さい。引きずるとベルが傷だらけになる。背負うとスピードが遅くなる。呼吸すら満足にできていないベルは深紅の瞳に光を灯していない。

「仕方ないか」

目の前にあるのは分かれ道。後ろにはミノタウロスと思われるモンスター。このまま逃げても追いかけてくるだろう。終いには地上に出てくるかもしれない。誰かが逃がしたのか知らんが面倒なことをしてくれたものだ。

「フンっ!!」

分かれ道、正解の方向にベルを投げつける。全力ではないが肩は外れただろう音が通路に響き、声にならない悲鳴をあげる。

「アリスっ!?!」

正気を取り戻したようだ。安心だ、ならばもう走れることだろう。

「逃げろ!・ここは私が止める!」

「何を言ってるっ!」

「足でまといだ!・行けェ!」

前からは雄叫びが、後ろからは悲鳴に似た声をあげる先輩の聲が。はてさて、斬れるのはありがたいことだ。人ではないのは惜しいが中々に強者なのはエイナから聞いている。

『ヴモオオオオツ!!』

「オーケー」

一撃、受け流す。

「いぎ、参る」

二撃、切り落とす。簡単なことだ。殺せばいいだけなのだから。

『ヴウウウツ!?!』

血が飛び散る。アリスはそれを躊躇うことなく浴びる。その中で間違いなく、和平は嘲笑った。

「スキあり。所詮は獣だな」

首を落とす。動揺のうちに懐に入るだけの簡単なことであった。

落胆したような顔で刀の血を拭き取る。

「すまない」

妙に若い男の声、血溜まりの中に在ったアリスに話しかけるとは酔狂な奴だと声のした方向を見る。

「ミノタウロスを見なかっただろうか」

「ミノタウロス？ああ、さっきの牛頭か」

既に灰と化した、血しか残っていない、もう和平の頭にはない化け物のことだろう。周りを見渡し、魔石を拾い上げる。

「これでいいか」

「いや、それは君がもらってくれ。討伐してくれたみたいだ」

「…………ふむ、君は誰だ？」

金髪の、小人族でいいだろう。手に持つ槍は業物だと一目で分かる。さぞ名のある冒険者なのだろうが、まだ覚えきれていない。

「【ロキ・ファミリア】の団長をやっている、フィン・デイルムナだ。今回は僕達の取りこぼしを拾ってくれてありがたい」

「【ヘステイア・ファミリア】の紫桜和平だ。アリスと呼んでくれ」

「【ロキ・ファミリア】か。ロキといえば北欧神話の悪戯神だったな。悪戯にしては物騒な神だが。それにオラリオではかの神のファミリアは最大派閥の片割れだという。その団長、ということは【勇者】の二つ名のある小人族か。」

「そうか、アリス君。討伐の礼がしたいのだが、本拠まで同行して貰えないだろうか」

「断る。すまないがまだ君を信用していないからな」

目が気に入らない。そんなに頭は良くないものの、目を見れば大体の人の人柄は分かる。悪い人間ではないようだが、探るような瞳がアリスをねめつける。

「これは貸しだ。仲間が気になる、もう帰らせてもらうよ」

「そうさせてもらうよ。では、また今度」

「……………気にいらんな」

だが、今はベルのことが気になる。最高派閥など目に入られるだけ面倒事になるに違いない。ベルが走る限り、関わることもあるだろう

ができるだけ少ないことを願いたいものだ。

「エイナさん大好きー!!」

そんな声が聞こえた。シャワールームで血を洗い流したあと、ベルのことを聞きたためギルドに訪れた。その時、扉を弾き飛ばし、ベルが飛び出してきた。扉は壊れていないものの、その真ん前にはエイナがいた。

「……何なんだ」

「あ、アリスちゃん。無事だったのねっ!」

「お、エイナ殿。ベルはどうしたのだ?」

エイナに連れられて個室に入る。そこで少量の説教を食らうことになった。なんで五階層に行った、だとか自分から死に行つたのか、だとか。アリスはまったく後悔していないのがエイナの説教に拍車をかけた。

「勝てたからいいではないか。それであのベル君はどうしたのだ?」

「……ああ、ベル君ね」

エイナによるとベルはあの後、またミノタウロスに襲われたらしい。そこで「ロキ・ファミリア」のアイズ・ヴァレンシユタイン【剣姫】に助けられたらしい。そこで彼女に恋愛感情と憧れを持ったのだとか。そして血塗れでここに転がり込んできた。

「そうなのか。……そうだったのか」

助けたつもりになっていただけなのか。そうなのか。ベル君を助けたのはその【剣姫】か、ああ、また家族を守れなかったのか。

「どうしたの?」

「ああ、気にしないでくれ。今回で学んだよ、では換金してくる」

「え、ええ、また明日ね」

またか、またなのか。嗚呼、彼女の血が流れ出ている。嗚呼。

万能な魔力さん

手甲が光り輝く。「魔力応用術」を使う時、一定の条件下で手甲が光り、その効果を増幅させることがある。まず【基本型】でないこと。周りの状況や生体反応を探る【探知】や神経系に魔力を流して身体能力を上げる【強化】、魔力を見えない壁として敵の攻撃を防ぐ【障壁】など応用を必要としないものは【基本型】となる。まだベルには使えないが【極型】は魔力を別の物質に変換し武器を作る【創造】や魔力を暴走させた上で身体能力を強化する【覚醒】などは魔術の中でも極めた者にしか使えないものだ。もちろん、基本型と極型以外にも【応用型】がある。ベルには半数以上は使えないがベルにはこれだけが手甲が光り輝く条件下になる。応用型はすべてが属性に由来する。炎を撃ち出す、炎を纏わせる、ベルにはできない属性もあるができるものもある。

しかし、条件は一つだけではない。もう一つだけ、条件があるのだ。それはクオンによると【闇】に関係があるらしい。純粹な【光】のみでは世界は救えず、神を殺すには邪悪な意思が必要、とのことだ。正直、意味が分からなかった。神を殺す必要などないだろうと思った。いまでも分からないままだ。片目に何か違和感がある。それと同時にナイフが黒いモヤを纏っている。

アリスに投げ飛ばされた後のことだ。一心不乱に走って地上に助けを呼ばなければ、と【強化】を行い速力を高めていた。

ドスン、と大きな音が耳に届く。今から曲がろうとしている道の奥からだ。

―別個体!?

アリスと戦っているミノタウロスにしては速すぎる。アリスの強さはクオンも太鼓判を押していたのだ、そう簡単にはやられはしないだろうし、もしかしたら倒してしまうかもしれない。

クオンに覚え込まされた地図を今いる場所と照合させ、次に行くべき場所を定める。

「クソっ!」

ミノタウロスの敏捷は今のベルでは到底越えられないものであった。力もベルのことなどぶちつと潰せることだろう。しかし、だ。クオンによるベルのための戦闘講座にて受け流しはまだ不安定なものができるようにはなっている。だが拳圧の回避はできないものだ。咄嗟に【障壁】を張っていないければぶつ飛ばされて最悪動けなくなっていただろう。

―塞がれた。

ベルの後ろの通路は行き止まりだ。T字路のうち、二つがミノタウロスによつて塞がれている状況。絶望、という言葉が最も似合うだろう。しかし、ベル・クラネルは少々恵まれていた。クオン鎮音による技術の継承により勝機は皆無といつて差し支えないが、逃げるには十分であつた。

【支給品のナイフ】はベルの通常装備である。もっと成長していればこれよりも強い武器をクオンが作ってくれたことだろう。少しの溜めを挟んだ後、地面に右手を置くと魔法陣が広がり直ぐに輝いて発動する。

真っ白い結晶が通路に大量に飛び出る。氷がごとく広がりミノタウロスの足にも伸びる。凍結の魔術である。数秒であるならミノタウロスの足も止めることができるだろう。ならば次である。罨をしかけにしかけまくろう、と生きる活路を見いだせると手甲が光り輝く。それと同時にナイフが黒いモヤを纏い、片目に違和感を感じた。―気にしてる余裕はないっ！

ミノタウロスが動けない数秒の間に精一杯の【応用型】を仕掛ける。
『ヴウウウウウツ!!』

コケにしやがって、舐めるな、そんな怒りが聞こえるような雄叫び。
【強制停止】の効果もあるようだが、不思議と今度は引つかからなかった。

【蠢け 炎雷】！

詠唱ありと詠唱なし。威力と使い勝手が大幅に違う二つ。詠唱をするのならば高い火力と効果範囲、そして魔力の減りが少ない。しないのであれば高い火力と低い火力、選択はできるもののその二つで魔

力の減りが安定しない。魔法陣によって地雷のような効果も期待できるが、これはあつてもなくても威力は低い。

手甲から勢いよく黒い炎から噴出する。Lv1如きの魔法はミノタウロスには効かないだろう。しかし、詠唱ありとなしがある意味はなにかを考えると分かることがある。詠唱とは唱える魔術をイメージさせやすくするためのものだ。ならば【蠢け】という言葉がどういう意味を持つか、だ。

【蠢く】とは虫によく使われる言葉である。気持ち悪く動いている、という意味にとられやすい言葉だ。

黒炎はミノタウロスに少し届かない地面に着弾する。それにこそ警戒していたミノタウロスだったが嘲笑うような歪な笑みを浮かべて角をきらめかせる。突進の構えである。ベルの走力では曲がり角に至るまでには至らない。

そして着弾した炎が形を変える。噴出するようなブシュ、という気の抜けた音とともに噴水の如く虫の形をした炎が噴き出す。

『ヴツ!』

それには少々驚くものの、障害とは認識しないようだ。瞬時にベルに視点を変える。何かから逃げてきたであろうミノタウロスは自分の使命以上に雪辱を晴らしたいと思っていたのかもしれない。

しかし、ベルはそんな牛よりも圧倒的に冷静であった。虫がごとく吹き出した炎はベルの魔法陣の起動条件にあっていた。設置した魔法陣はギリギリ三つ。それらが炎に踏まれて順番に起動していく。一つは水、一つはまたもや炎、一つは凍結。

まず噴水の如く水が陣から吹き出し、それを元よりあつた黒炎と新しく形成された深紅の炎により水が水蒸気に気化する。それにより視界が塞がれ、突進の構えが一旦解かれる。そして凍結によってその水蒸気が液化を越えて固体化する。それにより、表面のみではあるが厚い氷によってミノタウロスの彫像が完成する。

「よし、逃げるっー!」

足止めはできるだろう。しかしまた長い時間ではない。身体全体の動きを制限できるため、ある程度は安心して横を通り抜けることが

できる。なのでスルーしようとする。

ガキンツという音が鳴った。金属と氷がぶつかった音だろう。そしてブシュツという音が鳴った。刃物が肉に刺さった音だろう。それから速かった。音に気を取られたのがダメだったのだろう、いつの間にか、目の前には血があつた。

「えっ」

そんな声が出るのもおかしいことではないだろう。そして驚くうちに無意識に瞼を閉じるのを忘れたようであつた。

「あ、ガアアアアツツ!!!」

目であつた。目の中に血が入つたのだ。石鹼の泡が瞼の中に入つた時以上に粘着質の液体は不快に過ぎた。そして何よりも、痛かつた。未経験の痛みであつた。それ故に転がつたのだ。血塗れで地面を転がる。

「あ、あア」

何とか瞼を開けようとする。おぼつかない焦点に暗闇ではないが色を判別できない。目の前にいるのは分かるがどんな人物であるかは分からない。

「大丈夫、ですか」

「大丈夫、夫、じゃな、いですう」

未だに苦しむのはベルである。声から女性であることは分かる。しかし、少量だったのか数分転がっていると何とか見えてくる。目の前にいるのは長い金髪と金眼が特徴的な人形のような美しさをもつ少女であつた。

「すみません、血が目に入ってしまった」

「それは、こちらこそ。あれは私達が逃がしてしまったものだから」

「ああ、そうなんですか。助けてくれたんですから問題ないですよ」

あのままでも逃げきれていた。目への被害は大きいもののまあ無事ではあるだろう。まあ治療は必要ではあるだろう、早めに帰るのがいいと思われる。

「それでは、ありがとうございました。目の治療があるのでこれで」

そう言うのと走り出す。待って、とか言つて気はするが失明しては後

がない。何はともあれ、治療が何よりも優先であった。

「何やってるのよ、君は」

血塗れであることを忘れてギルドまで走ってきてしまい、エイナに説教をされていた。とりあえず、目に入った血を処理して個室にぶち込まれた。今日のことを話すとますます怒られてしまった。

「あの、アイズ・ヴァレンシユタインさんのことはっ」

「あのねえ、ギルドが教えられるのは公開情報だけなのよ？あちら、もしかして恋しちゃったとか？」

「それはない、ですけど」

「ああ、はいはい」

顔を赤らめたのをエイナに感ずかれる。事実、アイズには恋愛感情は持っていないのだが一応の調査といったところだ。目の前で色々と同様な様子を晒してしまった。

「【ロキ・ファミア】所属のLv5で幹部。二つ名は【剣姫】で……」

エイナの口からはベルでも知っているような情報であったがやはり嘲笑うような性格ではないことは予想するに易いことだ。

「……良かった」

「これで大丈夫？ベル君」

「ああ、大丈夫ですよ」

話を終えると個室を出て受付に移動する。それからは事務的な対応といつもの報告であった。それから、ベルにとって嬉しい言葉が飛び込んでくる。

「まあこれなら、五階層まで行くことは認めましょう。はあ、アリスちゃんともお話しなくちゃね」

「えっ、本当ですか!？」

後半の言葉は聞こえない。前半の言葉のみで舞い上がった。その

ままの勢いで出口に辿り着くと豪快な捨て台詞をもってギルドを出ていく。

「エイナさん大好きー!!」

「……何なんだ」

出た時にアリスがいたことにも気づかずに。

最悪の道へ

ベルは本拠にてまた数メートル吹き飛ぶ。何によるものか、アリスの拳によるものであった。時刻は夕方、なのにクオンは台所に立っていないかった。ヘステイアとクオンはバイトの打ち上げで外で食べてくるらしく、ベルもとある酒場のキャッチに捕まって食べに行くらしいのだ。

「む、そうか。まあそれはそれとしてもう一発殴らせろ」

「ちよ、なんでっ!？」

「ギルドで待っていなかった罰だ」

「ぐぶあっ!」

かくしてベルは白目を剥く。ヘステイアとクオンはそれをスルーし、アリスに話しかける。

【豊饒の女主人】に行くらしいな」

「そのようだ。引つ掛けられたな」

気絶しているベルを目を吊り上げて見る。イラついているのは丸分かりだがそれは笑って誤魔化すことにする。

「あそこは高いぞお? 持っけて」

「クオンくん! そろそろ行くよ!」

アリスの掌に麻袋が乗せられる。その中には今のアリスとベルではおおよそ稼げないような金額である。

「これは……?」

「返さなくてもいいぞ。じゃあな、今行くー!」

地上にいるヘステイアの声に応えてクオンは階段を駆け上っている。貰ってしまったものは仕方ないのでポーチにしまう。気絶しているベルに近づき、起こそうと体を触ったり大声をあげたりしてみるのが、起きない。

「待ってやるかあ」

そのついでに洗濯などの家事も終わらせよう。

騒がしい、賑やかなところが苦手だった。孤児院では行事ごとにパーティをやっていたが上手く馴染めず、肩身が狭かったのを覚えている。酒は夜に、静かな場所で一人で飲んでいたものだ。たまに妻や息子と飲んでいた。

起きたベルと一緒に【豊饒の女主人】に赴く。酒場の店員でベルの魔石を拾ったというシル・フロヴァ、という少女に席に案内してもらった。出されたのはエールという醸造酒。ビールのようなものかと思ったがそもそもビールを飲んだことがない。いつも清酒か稀に洋酒を飲まされていたくらいだ。その後、注文通り、ではあったがそれにいくらか追加されて料理が出てきた。店主、ミアがシルに法螺を教えこまされたかららしい。ベルは引きつった笑いしか出ていなかったが金は問題ない。確かに高いが、クオンから貰った分だけでも余裕で足りる。ベルはどうだか知らないが事実としてアリスは大食いだ。箸だけでなく和食の類は少ないらしく、器用にフォークとスプーンを使えばパスタやスープ、魚の揚げ物を食べていく。

「よ、よく食べるね」

隣のベルの声だ。地味に引いてるようである。確かに現在、ベルは大盛りのパスタを平らげようと闘っているところであった。アリスは既に同じ量のパスタを平らげ、揚げ物も半分は食べ終わっている。ベルの揚げ物もさりげなく狙っている。

「私は燃費が悪いんだ。栄養がなけりゃ好きなように動けん」

義体に流れている血は人工血液だ。故に輸血は誰にもできない。そして義体は常人より多くの栄養を必要とする。だからこそ、多く食べて、休まなければならぬ。

そんなことを考えるが、まあ当面はどうでもいいだろう。中層に突入する時にでも考えればいい。クオンから貰った分だけでも余裕で足りる程なのでもっと頼んでもいいだろう。

「楽しんでますか？」

シルが近づいてきた。お盆を持っていないところを見ると給仕の仕事は落ち着いているのだろう。ベルとアリスに笑いかける。

「圧倒されてますよお」

ため息をつくが如く、シルにジト目を向ける。それに対してシルはすみません、と返答する。料金が高く、まだ敷居が高く感じるのだろう。今日はクオンのおかげでまだ余裕がある。

「なかなか楽しんでるよ」

こうとしか答えられない。それに対して良かったです、と微笑みかけてくれた。嘘でもなんでも、女性のそういう表情は嬉しいものだ。それにしても、この店は何なのだろう。シルはまだしも、それ以外の従業員は常人をはるかに超える實力を持っている。雰囲気もそうだが、カウンターから見える裏で手伝いだと思われるおっさんが殴り飛ばされていた。女の子でも侮つてはいけない、と引きつった笑いしかでないように思えた。

「お仕事は大丈夫なんですか？」

シルがエプロンを外してベルの隣に座る。これによつてベルの両隣は美少女二人になる。両手に花、というものであろう。しかし、一方は中身が中年で生殖機能もない、頑張つて義体を服で隠している、色々と残念な幼女であるが。裏方は変わらず忙しいようだが給仕の仕事は落ち着いているようであった。アリスが見た通りの情報をシルが話し、ベルと談笑する。たまにベルが赤面しているがよく分からないのでそのまま料理を食べ進める。

追加注文をして、食べ進める。ベルはシルと談笑して盛り上がる。分割がしっかりとされていて、アリスが料理に集中している時だ。ウェイトレスの一人、金髪の猫人が大声で呼びかける。予約の団体さんが来た、とのことだが関係ないだろう。そのまま料理がつつく。

「おい見ろよ、えれえ上玉だぞっ」

「馬鹿っ、ありやあ【ロキ・ファミリア】だ」

「マジか、近づきたくねえ」

ん？【ロキ・ファミリア】だと？あの金髪の【勇者】だったか、あの気に入らない小人族が団長やつてる。しかもミノタウロス逃がし

やがった奴らだ。小柄なのが災いしたな、見えない。

「ベル君」

「なに？」

シルがミアに呼ばれて仕事に戻る。その後、ベルに話しかけた。無論「ロキ・ファミリア」についてである。印象や今の様子、それらを事細かに聞く。

ベルが助けられた「アイズ・ヴァレンシュタイン」は「剣姫」と呼ばれる第一級冒険者だ。化け物としても恐れられる彼女だが、ベルは人間味を感じたと言っていた。まあそれはどうでもいいがベルはそんなアイズに見蕩れている。料理に手をつけてはいるが味わっていないだろう。

様子としては、騒いでいる。飲み比べをしてリヴェリア？とかいう女性の胸を景品にするようだ。胸かあ、気にしたことはなかったがアリスも相応にあったな。ヘスティアは化け物だし。シルも結構あった。巨乳が正義なのかなあ。この世界ではアマゾネス、とかいう種族が平均してデカいらしい。むう、アホらしい。

「おい、アイズ。そろそろ例のあの話、みんなに披露してやろうぜ」

料理をほとんど食べ終わった。もう一口だというところで獣人の青年の声が酒場に響く。誰だろうか。

「あの話？」

アイズ、だろうか。声的には女性の声だ。内容が分からないらしい。

「あれだよ、十七階層で逃げやがったあのミノタウロス。それでお前が助けたトマト野郎だよ！」

確定だ。エイナと本人から聞いている。あの少女に助けられ血塗れになった同士はいることはないだろう。ベルもそれに気づいたのか、驚いている。そして恥ずかしいのか震えている。

そして周りの反応は、まだ無反応か。同じファミリアの連中は少し勘づいているようだな。

「そのトマト野郎よお、ミノタウロスの血で血塗れになって、しかも血

が目に入ったのかのたうち回ってんだぜ？抱腹もんだろうよ、おい！」

料理を食べていく。集中して少しでも話が入ってこないように。しかし、すぐ食べ終わってしまうが気分が悪い。吐き気を催すものではないので無視しベルに向き直る。

「ベル君」

反応は、なしと。【魔力応用術】で抗ったようだが倒すには至らなかったらしいからなあ。自分が無力と感しても無理はないか。私は倒したし。でも動きは止めて逃げられるようにはしたとのこと。それだけでも上等だと思う。【強制停止】かからなかったのはなんでか分からないらしいが。

「おーい、聞いてるかー？」

ポンポン、パンパン、と段々強くして叩くが無反応。ならば、手を自慢の握力にものを言わせて握ってみる。

「痛っ」

効果あり。では話を、つてクソつ。話がどうしても耳に入ってきてやる。黙ってくれないかなあ、あの阿呆。

「黙れ、ベート。ミノタウロスは私たちが逃がしてしまった汚点だ。恥を晒すような真似はやめろ」

ストップがかかる。状況はいまいち見ることができないがこれでベートとやらも止まってくれると、ベート？【凶狼】だっけかそんな二つ名で目を付けられたらボロクソに言われるんだっけ。キツイなあ、メンタルボロボロだよ。確かにそれくらい耐えられなきや冒険者やってられないかもしれないけどさあ、成長を潰してるかもなんだよ？それを理解してるのかなあ。

「ああ!?ゴミをゴミと言って何が悪い!!」

酔ってるなあ、ゴミだとよ。ふむ、体に合わせてお説教タイムだな。フィンとやらにはミノタウロスの貸しがあるからあ、大丈夫だよ。この体の馬力はクオンお墨付きだし、大丈夫だよ。うん。大丈夫、であってほしいね！

「ベル君。君は何になりたい？何を目指すんだい？」

「……え？そりゃあ英雄」

「ならばそれになるためにすることは？」

「強くなること。人を助け、救うこと」

「大正解。君の心ならできるだろう。でも強さはまだまだだ」

でもそのために今努力している。強くなるために休養、栄養、鍛錬は不可欠だ。ならば今やっていることはそのうちの栄養に入る。

「明日から私との組手も追加しよう。私は木刀で君は真剣だ。私も剣術や武術は嗜んでる」

付け焼き刃ではあるがそれを教えよう。強くなるためにはまだ必要なものはあるよね？

「心は君に何がある？君は何を救いたい？」

「え？うーん、と手を伸ばして助けられる人？」

「君は本当にそう思うのかな？」

「え」

「それならそれでいい。でも君にそこまでの力はまだない」

私は君やヘステイアを救いたい。守れなかった分、家族を守り通したい。全力で、命がなくなってもずっと、ずっと。

「私は君のことを息子のように思っている。君にとって私はなんだ？ヘステイアはなんだ？クオンはなんだ？」

「仲間で、家族だよ！」

「そうか、具体的には？三人のことはどう思っている」

「アリスは、僕なんかよりも強いし頼れる！神様は神様だし、クオンさんは僕を育ててくれたから親のような、存在だし……」

フフ、と思わず笑いが込み上げてくる。いい子だ、最高だ。この子は英雄になる、そう【至高の少女】が保証してみせる。そのためにアリスは、和平はこの子を支えるところでしょう。

「意地悪を言っただけ悪かったね。君はどうしたい？」

「強くなりたい、みんなを守れる力が欲しい」

「そう、か」

口出しは、しない。そのためなら何を辞さない覚悟だ。和平にそれを止める資格はない。疾走しだすベルを遥か前方から見ているし

かない。

「これを持っていけ。【来たれ《秋水》】」

アリスの手に現れたのは一本の小太刀。高周波が通った大業物である。元の体のアリスが常に腰にぶら下げていたものだ。

「これは？」

「小太刀だよ。いい物だ、君にやる。君の道を進むといい、それが闇だったとしても」

ベルの瞳の色が変わっている。深紅から黄色に変わっている。クオンから聞いたベルの闇の素養、ベルならば闇の中でも挫けずに操ってみせるだろう。心を墮としてしまわないだろう。もし墮ちてしまったら、処分は私がする。

「……はい！」

ベルは駆けることだろう。最悪の道を家族と共に。

「アイズ・ヴァレンシユタインの隣に雑魚はいれねえ！何よりお前がそれを認めねえ」

蚊帳の外で狼が滑稽に騒いだ。

彼の理想

誰かが死んでも悲しまない。屍を超えるのとは少なくなかった、というよりその方が多かった。彼は兵隊である。人の上に立つなど考えたことがなかった。指揮などとれようもなかった。だからこそ彼は主を、自分を導いてくれる者を欲した。経験があらうとも和平は導く者にはなれない。ただ共に歩むことしかできない。上から目線でベルに語ったがそれも本当であるか分からないのだ。感情を抑えることはできそうになかった。紅い炎が義体から溢れ出すのが幻視できた。

「追いかけないのですか？」

後ろから声が聞こえる。振り返るとエルフの女性が目に入る。咎めるような瞳だ。当然であろう、新人である仲間を夜のダンジョンに送ったのだから。彼女の目には死地に送った、ともとれたかもしれない。

「エルフ殿、彼は死にませんよ。様子は見に行きますがね」

ご馳走様でした、と手を合わせる。足の短さを恨めしく思いながらぴよんと椅子から降りる。

「女将さん、会計はこれで」

クオンから貰ったヴァリスをまとめてカウンターに置く。会計にしては多すぎる。

「多いよ」

「貰ってくれ」

ミアは鼻を鳴らして麻袋を取る。見逃してくれる、ということだろうか。駄目ならここで償いをすればいいか。

歩く先は「ロキ・ファミア」のテーブル。アリスが瞳の中に入れるのは灰色の狼人。ベート・ローガと思われる青年だ。

「嗚呼、酒に溺れた患者の遠吠えのなんと耳障りなことか。大見得きって振られた男のなんと滑稽なことか」

「……ああ？」

当然ながらその言葉に狼は反応する。普段から短気であるが酒の

入った彼は特に短気だ。

「なんて言いやがった？」

ゆっくりと立ち上がるとアリスとの体格の差がよくわかる。ベルトの腰ほどの身長であるアリスは正しく子供だろう。

「愚者と言ったのだよ、ベート君。年長者は敬いたまえ」

「この、クソガキがつ！」

腕がブレる。振り下ろされた拳は簡単にアリスの顔にめり込むのだろう。そう、酒場の客と店員は幻視した。しかし、現実は違う。アリスの小さい掌の中にベルトの拳は収まっていた。流れるように、造作もなく、簡単に、弱者であるはずの少女に第一級冒険者があしらわれる。

「人を見た目で判断するなよ下郎。お前如きには負けんよ」

「離しやがれ!!」

ベートはアリスを睨みつけ、手を振りほどく。周りは、動けない。アリスは微笑んでベートを見る。ベートはアリスを睨みつける。

「ふむ、ベル・クラネルはどうしてた？アイズ・ヴァレンシユタイン」
「えっ？」

視界の端にも収めていなかった金髪金眼の少女に視線を移す。数秒間、答えないところを見ると次は自分も面識のある人物に視線を移した。

「罵倒するのは勝手だが周りはちゃんと見ろ。フィン・デムナ、これで貸しはチャラにしてやろう」

「……君はっ!？」

「君の反応などどうでもいいことだ。ではな、私は先輩を迎えに行く」
フィンはいよいよやくアリスのことを認識する。ベートが手を出したこともアリスがいと也容易くそれを掴み取ったこと。いかに【勇者】でもその状況に動転せざるは得なかった。それでも最初に復帰したのは彼の経験故だろうか。

「待てや」

少し遅れて、後ろから声が掛かる。聞いていた限りロキの声である。悪名高い名であった、ならば無視するが最善だ。そう思っ入口

に歩みを進める。出た後の行動は迅速であった。邪魔な服を脱ぎ捨て、義体のアシストをいかに早く發揮しダンジョンへと走る。ロキが指示を出すよりも先に、ただ早くだ。

「フィン」

美しいエルフの女性がフィンに呼びかける。

「彼女の言う通りだ。貸しはこれでナシ、彼女との縁を潰したくない」「そうやなあ、店出てった白髪の坊主が当事者やったんかあ。そりや絡みたくもなるわ」

フィンとロキが呟く。アマゾネス姉妹によつてベートは吊るされ、その後も宴は滞りなく続いた。剣の姫と勇者だけは浮かない表情ではあつたが。

夜の帳はとつくに降り、メインストリートは魔石灯と月光によつて照らされる。まだ人集りはある道の中で少女は歩く。その途中、彼女は知人と出会うことになるだろう。

「アリス？」

「クオン？どうしたんだ？」

「ヘスティアを送つてな、これから個人的な用だ。お前は？何処に行く」

路地から出てきたクオンはアリスに問いかける。

足早にバベルへと向かっていたアリスの目的はクオンにはわかるだろう。どうしても吐かせたいらしい。

「ベルを迎えに」

「・・・そうか。闇は？」

「片足突っ込んでるな」

丁度いいか、とクオンは呟く。何が、と聞いてみるが適当にはぐらかされた。

「神を殺すには闇の力が必要だ。ならば闇とはなんだ？闇由来の力と

「はなんだ？」

「私に聞いてどうするんだ」

「答えてみる」

神殺しには闇が必要、闇の由来とはなにか。闇という言葉が表すのは暗いこと。真つ暗や真つ黒がそれに当たるだろう。ならばそれが示すのは？ 恐怖だろうか。人間とは未知に、見えないことに恐怖する。だからこそ探求を続ける生き物だ。それを消し去ることで初めて恐怖を克服する。ならば闇とは未知であるものに、真つ暗闇であることに恐怖した人間が作り出した概念ではないだろうか。

ここで話は変わるが人には他にはない力がある。「観測の力」といって、人が見たものをそうであると定める力だ。これは創造主ですら悪魔に堕とすほどの強力なもの。ならば人が作り出した概念が力になってもおかしくはない。だろう。その究極系が神であり、妖の類だ。

「大正解。つまらん」

詰まる話、人が恐怖する概念そのものだと思ってい。だからこそ光と闇が均衡を保って世界が保たれるのだと思っている。ここに来て改めて思い知ったものだ。

「ベルは堕ちたら？」

「殺す。助けられたら助けるが、まあ大体殺すな」

「そうか」

殺す。そのワードが重く感じなくなったのはいつ以来だろうか。皆殺しにするなどいつものことであつたし、拷問や尋問もたまに担当していた。

「虚無も覚えさせた方がいいかな」

「虚無？」

「いや、なんでもない。帰ったらやりたいことがあるから付き合ってくれな。昨日設備が出来上がったんだよ」

「何の？」

「帰ってきてからの楽しみだ」

ハッハッハ、と笑って闇の奥に消えていく。それを見届けた後、

さつさとダンジョンに走っていく。全く心配はしていないのでオーグメントモードを起動し、マップ機能を使う。

「さて、どこかな」

確かに、世界は光と闇の均衡によって保たれている。世界から闇が消えることは無いし、光が消えることも無い。光のみになろうとするなら闇の勇者が、闇のみになろうとするなら光の勇者が出てくることだろう。光が強すぎれば闇が生まれる。闇が強すぎても光が消えることはない。なくなつたとしても闇の奥深くで眠ることだろう。そして光の勇者によつてそれは白日の元に晒される。

「闇も光も正義の定義からは外れるものだ」

神は闇から生まれた。人は何から生まれたのだろうか。死の概念がある、最初から役割が定められた神とは違う明らかな不確定要素のある不安定な存在。それを生み出した原初の存在はどうやって生まれたのだろうか。

「身体は換えが効かんものなのは昔の話だ、そうだろうか？」

誰に話しかけているのかは分からない。近くには誰も視覚できない。クオンにのみわかるのか、それとも虚像に話しかけているのか。本人にしか分からないことだ。

新しく作った【魔力起動式手甲】これは医療系の最大手【ディアンケヒト・ファミリア】と魔道具系の最大手【ヘルメス・ファミリア】に助力を願った最新作だ。義手のような役割も果たせる上、動力は魔石の魔力で代用できる。この義手で魔石を碎けば動力を確保できる。それにこの技術を流用して他にも様々なものを作ることまでできる。その実、アスフィやディアンケヒト、アミッドもホクホクした顔で帰っていった。この都市に限らず、クオンの持つ影響力は絶大なものである。

【メンテナンスルーム】もできたし、これでアリスは心配ないかな。

それにあの身体のこと調べられれば」

「まだまだ義手義足の研究は捗っていくだろう。最終的にアリスと同じような義体を作るのが理想だ。ゴーレムを作った方が早そうではあるがオラリオでも再現できるものでなければ意味がない。」

「帰るか」

「星空を見るのに飽きたのか、手に持った酒瓶を持って夜の帳の中に消えていく。」

義体 《からだ》

義体には種類がある。完全な鎧のような【甲冑型】と全身タイツのような造形の機動性を重視した【人体型】そしてその中間となるまだ試作型で名前のついていない型。仮に【人甲型】とする。【アリス】はその最初期型であろう。最初に地下室に来た時、まだ【メンテナンスルーム】が完成はしていなかった時だ。まあ大体の機能はできていたので寝ていたアリスを起こさないように調べた。義体が造られたのは第三期。

正式名称は【第三期戦闘特化換装可能型人体甲冑 試作初期段階 至高であるアリス】だった。

名前からして義体は変えられるようだ。【恩恵】は問題ない。背中に刻まれるものではあるものの、魂に刻まれそれに伴って成長を手助けするものだ。義体はどうあれ魂が変わらなければ成長は続くものである。保管にはなかなか厳しい条件があるがベルと共に旅をしている時に条件を越えることができた。長年求めてきたものがやっとな見つけることができた。

『冷却を開始します』

オラリオには似合わない部屋が【ヘステイア・ファミリア】の本拠にある。青白い光と人が入れるくらいのポットが一つ。今朝完成したばかりのものだ。ポットのそばにそれを制御する端末が置かれている。やけに近未来的な部屋でクオンがその部屋の隅でノートパソコンをいじる。確実にオラリオに、いやこの世界には有り得ないものがこの部屋に結集している。聞こえた機械音声は義体が冷却されるのが再び開始される合図だ。魔力により動かすことに成功した機械が立ち並ぶこの部屋はクオンかクオンに許可された者しかここには入れないようになっていいる。ここはオラリオの最重要機密といっても過言ではない場所なのだ。それくらいはして当たり前だろう。

ここの役割は機械の保全と義手や義足の研究、義体の保存だ。二年の放浪によりクオンは答えを出し、研究はほとんど終わりとなった。義体はクオンが独自に造り出したもので、まだ【人類】に造られた訳

ではない。

「そろそろかな」

クオンが作った【魔力応用術】においてクオン以上に熟練した者はいない。今も尚、新しい技術を探し続けている。【探知】はベルだとギリギリ一区画探せるか探せないか。クオンだと余裕で都市全体を探し尽くせる。地下もダンジョンも関係なしだ。どれだけ規格外かは、これだけでも分かるだろう。

指紋認証で扉を開ける。その先にはベッドに寝かされているベルとそれを見守っているヘステイアとアリスがいる。

「無茶をしたのか」

「そうだな、貴方の思い通りか？」

見守っている、と思っただが寝ているようであるヘステイア。そしてその近くで丸椅子に座って、顔だけクオンに向けているアリス。

「やめてくれ。私はベルの成長を願っているだけだ」

一瞬、だろうか殺気を向けられた気がするがまあどうでもいいことだ。それを笑ってはぐらかすことにする。

「いや、何か企んでいるな。私には分かる」

「おお、鋭いな。まあお前たちには不利益にならんことだよ」

クオンのやっていることはヘステイアも関知している。ベルも多少は察しているようだ。そしてアリスは最初からクオンのことを疑わしく思っている。まあ【ファミリア】にも入っていないのにここにいるのはおかしい。疑って当然であろう。

「昨日やっとなり完成したんだ。入ってくれ」

【メンテナンスルーム】の扉を開ける。クオンのいる位置からはポットが見えた。クオンが入り、扉を閉めないでアリスが入ってくるのを待つ。

「どうした？入れよ」

「どうしたって、ここは」

驚いている。そうだろうな、彼にとっては馴染み深い場所だろう。自分のメンテナンスを行い、義体の保全、栄養管理、交換を行うポット。それを制御する端末。本来なら別の場所で行うであろう高周波

加工または武器製造を行う作業場。それらが部屋に結集されている。「義手や義足を造ろうとしたらこんな場所を作らざるを得なかったがそれのおかげでお前の義体を管理できるようになった。安心しろ、お前を研究材料にするだけだ」

もちろん殺さん、と付け加える。クオンからしたらアリスの存在は有難いのだ。それにこの派閥に来てくれたのは僥倖であった。他世界からの訪問者であろうともその技術を貰うのは悪いことではないだろう。義体の解析ができればもっと完璧なものを作れると考えている。なしでも数百年で到達できるとは思うが、手伝いはしたいのだ。

「どう作ったんだ？申し訳ないが、まだ」

「疑っているんだろう？スマンが寝てる時にお前の義体を調べた。その時に分かったことをお前に話す」

「……分かった。その代わり、つてところか」

大変遺憾だが、ということが顔に出ている。彼にとっては願ったり叶ったりだろう。義体の交換ができ、高周波加工もできる場所。これは最高の場所であるだろう。

「お前のおかげでまた進めるんだ。義手と義足、義体が造れるようになるかもしれない。つまり、手足無くした者を助けられる上ついでに金も稼げる」

「分かった分かった。……好きにしろ」

「おーけー。なら分かったこと教えてやる」

さすがに嘘ではないと分かったのか、アリスは了承する。

その後は分かったことをクオンはペラペラと話していく。義体の名称と機能だけではあるが、それも重要であろう。

「三期？」

「どうした」

「いや、私の義体は第二期に造られたんだ。アリスは第零期。だからこの義体は」

「お前がいた時より未来であるはずの義体ってことか」

「そうだ。それに換装可能型はなかったはずだ」

「そうか、構想段階ではあったか？」

「構想段階ではあった、と思う」

「ふむ、色々推測はできるが、とりあえず換装の準備はできてる。それに今日からここで寝てくれ」

「分かった。頼んだぞ」

端末を操作し、アリスが入れるようにポットを開ける。プシューという音と共に人が寝転ぶことができるスペースが現れる。そこに寝そべり、収納される。義体の収納された装置と繋げる。

「換装するか？」

ポットの外から呼びかける。それに答えるのは端末のメッセージ機能だ。

『もちろんする』

そう、返信が来た。ならば選択肢が必要だろう。メッセージ機能を使い、今あるアリス用の換装義体の画像を送る。その返事は「人体型」だった。その方が色々動きやすいし服も着れて偽装もできる。完璧だ。

『換装を開始します』

機械音声が流れた後、駆動音と共に機械が起動する。待ち時間はそう短くなかった。初めてのことであるので慎重に行わねばならない、ということもある。

アリスの身体を調べてから三日で甲冑型と人体型を造り上げたのはクオンの手腕によるものだ。アリスの人工血液を、仕組みを、完璧に理解した後にそれらを再現した上で義体を造り上げた。それは一重にクオンの異常といえる技術と知識によるものだし、クオンがみた古代都市によるものでもある。

終わった後、アリスをポットから出す。出た時のアリスの体は黒いだけで普通の人間の体と同じ形をしている。子供でなければあらゆる人の劣情を煽るであろう容姿をしている。

「パワードスーツでも着るか？」

「あるのか？」

「ああ、あるぞ。奥にな」

「なら、着させてくれ」

「おーけー」

ポットからみて右方向にある扉。それを開けて奥に進むと義手と義足が無数にある作業場があり、その更に奥には武器やパワードスーツが作られている作業場がある。それらを見てアリスは目を丸くさせ、終始見回していた。

「いい場所だろう?」

「あ、ああ。こういうのはよく分からないが凄いのはよくわかる」

「そうだな。技術力だけならここが最高峰だ。お前が着るのは、あれだ。パワードスーツとは銘打っちゃいるが違うものだな」

クオンが取り出したのは黒いロングコート。しっかりパワードスーツっぽいゴツイものもあるがオススメはこれである。

「どういうものなんだ?」

「名前は【闇の衣】だ。直球すぎるが、普段はオススメだな。魔力で編んでるから絶対に破れないし、身体能力アシストをつけてる。物理攻撃と魔力攻撃を軽減もできる」

「とすると、あれは?」

壁の中央に鎮座している白を基調としたパワードスーツ。大きいものではなく、動きを阻害するようなものでは無いだろう。

「パワーアシストもついているが大体はこれと同じだよ。でも壊れもするしおすすめはしない」

「そうか、ならこれをもらおう。金は出した方がいいか?」

「いらない。投資だと思ってくれ」

【闇の衣】を手渡す。ありがとう、と疑いようのない、爽やかな笑みをクオンに見せてくれる。もう隠し事は、ない訳でもないが敵ではなく、有害ではないと認めてくれたのだろう。

「どういたしまして、だ」

これで研究が進む。そう考えることにする。しかし、どうしても嬉しい、という感情は隠せそうもない。まだまだ働かなくては、と再び兜の緒を締めなおす。

怪物祭 狼

高周波加工されることにより、武器の能力は飛躍的に上昇する。和平のいた世界では電力により高周波がなされていた。しかし、オラリオでは魔力により代用されている。アリスの持っているものはスキルによって常に最高の状態に保たれている。そしてベルに渡した魔法で出した【秋水】と同じ特性を持っているようだった。ベルは【魔力応用術】によって魔力の扱い方と魔力量が通常のレベル1より遥かに長けている。だから【秋水】の切れ味が変わっていなかったのだろう。血だらけだった、とはいってもほとんどが返り血だ。疲れて、精神が摩耗してただけだった。最も、不思議なことが笑っていたのだ。目は閉じ、ダンジョンの真ん中で笑いながら寝転んで気絶していた。血溜まりの中で、灰の中で、贈り物を大切そうに持つて。【戦闘狂】ではあるのだろうか。これからの道次第で人殺しにも英雄にもなりうる器だ。この時にまた確信した。

クオンがベルに贈ったのは新型の【魔力起動式手甲】だ。変換効率と強度を更に高めたらしい。それに新機能も付けたらしいが教えてはくれなかった。ベルには教えていたが。もしもの時用のものらしいので知らないのもまあ許そう。

「アリス、その身体って」

「ん、変えた」

「え、変えたって身体を？」

「ああ」

アリスも新しい武器を貰ったのだ。刀であるようだが何とも異様な形をしている。銘を【高周波 舞妖】妖しく舞え、とのことであった。刀身が透き通っており、恐ろしく軽い。そして切れ味は普通であった。元々持つていた【高周波 羅刹】よりは切れ味が低い。使う場面はそう多くないだろう。

「君も、手甲を変えたんだらう？どうなんだ」

「使い易いよ。軽いし」

「そうか」

数日前、ダンジョン内でベルも共にみたカーゴ。その中に入っていたのはモンスターだった。毎年やっているらしい【怪物祭】なる催し物のための準備だとエイナから聞いた。二人には関係のないことだ。いくらクオンが巨万の富を持っていようと稼ぐことは義務だ。毎日ダンジョンに潜るのは止められることではない。ヘステイアもクオンも今日は忙しくなると早くから出ていった。ならば我々も同じように忙しくしよう。そう、思っていた矢先のことであった。

「おーい、その白髪頭とチビツ子ー！」

メインストリートを歩いていると馴染みといえる【豊饒の女主人】から声が聞こえる。声の先には金髪の猫耳少女。呼んでいるらしいので、近づく。

「はい。これをシルに届けて欲しいのニャ」

何も言っていないのに近づいただけでカエルのような形の財布を渡される。所謂がま口財布と呼ばれるものだが、何故こちらに渡したのかが分からない。渡されたベルも首を傾げている。

「何故これをシルに渡すんだ？」

少しの沈黙、ニコニコしている猫人にアリスが聞く。言葉を聞くと鼻を鳴らして首を傾げた。分からないのニャ？的な感じで。また少しの沈黙が続き、救世主が現れる。猫人の頭に拳骨が打ち下ろされ、ゴツン、と痛そうな音の後に猫人は蹲る。

「説明しなさい、アーニャ。それではクラネルさん方に分からないでしょう」

そう、平坦な口調ではあるものの威圧感のある叱りを猫人にぶつける。薄緑色の髪色で吊り目ではあるもののそれが美しさを引き立てているエルフであった。酒場の店員なのだろう、騒ぎを起こした日とその翌日、謝罪しに来た時に見ている。後者ではがつつりあつて話している。その時には自己紹介もできていなかったはずだが。

「お馬鹿だニャー、リユーは。シルがお祭りに行つて財布を忘れたことくらい誰でも分かることニャよ」

その言葉にもう一度拳骨が打ち下ろされる。アーニャ、と呼ばれた猫人が睨むがリユーと呼ばれたエルフの静かに怒りの灯った瞳に気

圧されていた。

「そういうことです。申し訳ありませんがそれをシルに届けていただけではないでしょうか。ダンジョンに行くところ、申し訳ないのですが」
模範的な頭の下げ方と言えるだろう。そんな頭の下げられ方をされてなくとも二人は根はお人好しであった。頼まれただけでも二つ返事で引き受けることだろう。

「アリス、いいかな」

「今日は祭りを楽しむことにしようか」

「そうだねっ。引き受けます、リユー、さん」

ベルはリユーに引き受ける旨を伝える。リユーはそれに少しの笑顔で応え、ありがとうございます、と答える。

二人に見送られた後、二人は路地裏に隠れることにした。シルにGPSのような便利なものは取り付けていないが情報は十分にある。この世界においてクオンの用意した義体は正に適している。「魔力応用術」なるものに最適な義体となっている上、動力のほか、マップ機能において【探知】機能が付与されていた。つまり、記録されていれどどんな人物でも探すことが可能なのだ。それはシルでも例外ではない。前の義体で接触した人でも問題なく作動するようになっていくようにしている。

そうなれば人探しなど簡単なものであった。さっさと位置を割り出してやれば、そこに向かうだけなのだから。

造られたのは何年前であっただろうか。月日など忘れてしまった。ただ、長い時の間で残ったのは俺だけだったようである。

格納庫から出されるのは何年ぶりだろうか。そんな狼の前に現れたのは二人の人間だった。一人は、データベース上の兎に似た少年と金髪の子供。この職員ではないようだ。攻撃対象に認定は、できな

い。施設全体が機能停止しているのか、指示は全く飛んでこない。「長い間眠っていたな」

子供らしくない掠れた、低い声。そんな声が金髪の子供から出てくる。

そうらしい。この施設に人間は目の前の二人しかいないようだ。

「私と一緒に来て欲しい」

『何故だ』

特に何もやることがないのだ。ついていってもいいが何故か口から漏れてしまった。口から発生している訳では無いがな。

この施設を含めた町は特殊な防壁に包まれていた。一度だつて敵が攻めてきたことがない。そのせいであろう。外部の人間が来れないであろう2人が来るまでに荒廃しきっているのは。外の様子は眠った時とはかけ離れた様相となっているようだ。

「有難いから。あと、暇だろ?」

『そうだなあ、暇だ』

「なら決定だな」

『そうなるのか、まあいいだろう』

人工知能とは恐ろしいものだ。眠っている間にも成長して進化しているとは。間違いなく眠る前になかった感情や欲望を取得している。知識欲というのだろうか、存外、心地よいものであるようだ。

ガシヤン、ガシヤン、と未だに綺麗で真っ白な床を歩く。地下に相当するこの場所は照明が消えて薄気味悪くなっている。だが、構わずに二人は進んでいく。

「あ、名前はあるの?」

やっと、少年が口を開いた。名前、名前か。どういうものだったか、個体番号も忘れてしまっているようだ。なまえ、名前は

『ウルフ、そう呼ばれていた』

まあ、本当にそうかは定かではないが。

『おーい、聞こえるかー？んう、これ調子悪いのかなあ』

『聞こえている。なんだ』

地下水道。オラリオの地下に位置するこの場所にただ一匹、ウルフは派遣されていた。上では祭りが開かれているようだが彼自身に興味は微塵もない。

頭の中に直接響いてくる声。最近【通信機】が完成したため試したいようだ。ついでにウラノスの依頼も達成するために地下水道にいる。ガシヤン、という音に加えて水音が空間に響く。古代都市にいた時より改造された狼機械の身体は遠近両方をこなせるようになっていた。斬る、撃つ、燃やす、潰すが可能になる造りらしい。これこそ兵器よっ！とか言っていたが正直よく分からない。

『聞こえてるんだな、よし。依頼の場所は分かるな？そこに向かって調査してくれ。なにか居たらなんか持ち帰ってくれ。モンスターなら殺す。分かったな？』

『了解した。モンスターがいる』

依頼の場所の目の前。まだ捕捉はされていないようだが奥にモンスターがいるのが分かる。安心安全の暗視である。

『どんなだ』

『緑の、鳶のような体だ。蛇？いや植物の可能性もある』

『そうか、取り敢えず戦ってみてくれ』

『それから決めると？了解だ』

ウルフの体で尾の役割を果たす部分、それを背中中の武器に先端を繋げる。そして自分の四肢の如くに振り回すと水に当たり、ピシヤン、と音が鳴る。当然のことであるがそれでモンスターはウルフを察知する。

今接続しているのは刀、標準装備は刀に加えて爆破装甲に魔力装填式の二連撃ちのリボルバー、超重量の槌である。それら全ては背に収納されており、もつとも使用頻度の高い刀は背中の上に専用の置き場

が設置されている。当然、高周波加工はされている逸品だ。

それらを背に隠していても速さは据え置きだ。モンスターの数は、五体。全員が緑の細い体と地中に隠している触手を利用してくる。そして隙あらば噛み砕こうと口を開いて突進してくる。それ以外はの攻撃は、ない。

『植物かつ！』

『そうか、なら』

『分かっている！』

背中に位置する格納庫、刀が収納され、中から出てくるのは太刀。先程のものより二倍以上の長さのそれを尾で易々と持ち上げる。そして、燃えた。刀身がそりやあメラメラと。これもまたクオオンの加工で、銘を【属性変更可能型大太刀 幻視】とでも呼べ、と言っていた。ダサイので呼ばない。

それからは簡単だった。触手も本体も全部燃やしてし斬れば良いのだから。消化試合と言っても過言ではなかった。事実、その場にあったモンスターは燃えて消えた。最期に花を開いて、灰になった。

『あれは、根』

『まだあるのかっ？』

『いや、倒したはずだ。ということとは』

『地上に出たかもしれない、か。放っておけ』

『確かに。本拠に戻る』

戦利品を回収した後、ウルフは地下水道を本拠の方向に歩いていく。バレないように、慎重に。

怪物祭 不死

彼の目の前には深淵のみがあったという。彼は創られた存在ではなかったのだと。伝承は一切残っていない異形にして最古の創造主。神ともヒトとも違った彼であるからこそ、世界の基盤を創ることができたのだ。それからたまに遊び感覚で介入してみる、なんてこともするが大体は放置であった。世界は形作られていき、やがて別れていく。そして派生世界が生まれ、更にそこから完全な別世界が生まれる。世界とは最上位の世界が一つ存在し、それを規範として無限に世界が構築される。これは彼の意図しなかったことではあるが嬉しい誤算であった。そしてヒトが生まれて神が最初からそこに在るべくなった。そして彼の前に残ったのは残った深淵の処理だ。無限の闇、というのだろうか。これがあるからこそ世界に光と闇の概念が生まれた。そして世界は光と闇の均衡によって保たれるようになっていった。ヒトは光でもあり闇にもなる存在だった。有り様を簡単に歪めるその生き様には度々彼を興奮させた。そこに【観測の力】も加わるのだから興奮しないわけが無い。本来ヒトに無自覚であるはずのこの力は神を在るべくさせるのにそう時間はかからなかった。それによってねじ曲がった歴史もそのままになったのだ。真実、神なんてものは後付設定の様なものであった。まあ、世界によっては少し歪むが、大体は同じである。

まあ、そんなことも吹っ飛ばせるのが全知全能であり、万能の存在である彼なのだが、彼は滅多なこと（休暇）がない限りは世界の有り様を歪めないし、そもそも他世界にひよいひよい移動しない。薬で不死になったなら死ぬ方法は絶対にあるし、神の不死もまた未完成なもの。全ての世界を含めても完璧な不死は彼だけであった。そんな彼は暇な時間を鍛錬や勉強に費やすと新たなものを次々に生み出した。魔術、魔法、だったり民族だった。やっべ、と思った頃にはもう遅い。民族、エルフなのだがは彼発信のものであったのだ。だからエルフが魔法に長けてたり、魔力が多いのは当然のことなのである。魔法実験の末に生まれた民族なのだから。そして彼の問題はまだまだ山積み

であった。世界が原作と違う動きにならないか、とか均衡は保たれているか、とかいつもは忙しいのであった。急に仕事が減ると旅行にしょっちゅう出かけている。そこで弟子を取ったり神を半殺しにしたり、やばいことを率先してやっているのが彼なのだ。

そんなことは置いておいて、である。ヒトの本質は闇だ。それがいかに変容するかで個人が決まる。ベル・クラネルの闇も侵されているのではなく、元々自分の中にあつた闇を自分の光によって更に膨張させている状態なのだ。風船のようなものだと思つたらいい、いつかは爆発する時限爆弾としても考えてもいい。思考を巡らせるのはタダで気も回せるというものだ。だから制御用に過去から呼んだのだが。

魔物もよもや自分より、また自分を捕らえた者より小さきものに殺されるとは思つていなかっただろう。グチャリ、などとグロい音をたてて大猿の首が落ちた。それを為した小人族は素手であつた。助けたのはそれを軽く見る下級冒険者。底辺も底辺と呼べる男を彼女は助けた。

「ありがとうよっ」

そう言つて男は駆け出していった。底辺故だろうか、プライドは毛ほども持つていかなかったようだ。ただ、今日を食いつなぐ為だけの男なのだろう。

そんな愚者を見送るとベルのことを思い巡らせる。彼が少女を拾つて逃げていったのはダイダロス通りの方向だが、追いかけていったのはクオンが殺したのと同じ種類の魔物だった。あの程度に負けることはない。殺すのは余裕であることだろう。それに、

懐に入れていた通信機が呼び出し音を鳴り響かせる。そんなに大きい音ではないが煩わしいと思う程度には大きくしている。

「アリスか」

『ああつ、そうだ。そつちは今どこにいる？』

「闘技場近く。お前は、三人か」

『ベルはどこに？どんな状況だ？』

「ベルは、心配ない。直ぐに戻るだろうよ。状況は、そうだな闘技場からモンスターが逃げ出した。後、ウルフが地下で獲物を取り逃してい

る。出る位置は闘技場近くの広場だ。私は行けない、お前が行ってくれ。他のファミリアがいようと関係なしだぞ。あと魔石を持ってきてくれ」

『……分かったっ！へスティア達を避難させたら急行する』

「ああ。私も避難誘導に注力する」

プツン、と通信が切れる。【探知】でこちらのモンスターを調べてみるが、まあ少ない。【剣姫】が掃除しているようだ。それにウルフが接敵した【新種】は近くの広場に姿を現している。【ロキ・ファミリア】の小娘たちが応戦しているようだ。戦況は芳しくないようである。『どうでもいいか』

考えを巡らせてみても最終的にどうでもいい、と一言で片付いてしまふ。ギルドとは協力関係にあるが、別段気にしてもいない。世渡りは得意ではあるものの、好んでは行いたくない。クオンはどちらかというとならぬと脳筋である。

「帰ろ」

クオンにとって、ベル以外の人間は等しくどうでもいい。世界が滅んだとしても、だ。ベルの生死も、これからどうするかも、どうでもいいの一言で片付けられる。正直、放っておいてもなんら支障はないのだ。そもそも、干渉してはいけない立場でもある。

【魔力応用術】には適性というものがある。太古と呼ばれる時代、神が降りる、英雄譚の時代よりも更に昔の話だ。その時代に【魔力応用術】は最盛期を迎えていた。それを最初に究めたのがクオン。そして瞬く間に人類にも広がっていき、クオンの弟子もまた多くなった。その中でも人によって違ったのが【応用型】であった。属性によって極める方向が違っていった。学問のようなものでもあったのだ。なので学舎は学校のようなものであったという。座学で基本を学び、応用は体で学び、極は死をもって学ぶ。その時に世界に蔓延るはモンスターではない。ダンジョンはあったが、底から這い出るのは悪魔と呼ばれる異形。それに対抗するためにもエルフは魔力を用いたものを、ドワーフは鍛冶技術を、ヒューマンは人の身のみで行える技を、それぞれ探求した。あらゆるヒトは魔力を身に宿している。魔力とは原初の力、光

と闇を起源とし、それを最も近いものである。クオンが古いオラリオを訪れて終わりに近い世界を救うために色々模索していた時であった。現れたのは後に【闇派閥】と呼ばれる集団。悪夢のようにクオンの教え子もそれに入っていく、クオン自身の手で鏖殺された集団であった。その何千年後であっただろうか、ヒトがダンジョンの最深部に到達し悪魔の首領を殺した。その更に下には町があった。見たこともないような大きな建物が立ち並ぶ当時のオラリオでも見たことないような町。天蓋に閉ざされ、どうにか上に行こうとしても首領によつて皆殺しにあつたらしい。【東京】と呼ばれた都はオラリオとの直行便を作ることとなつた。二つで技術をかけあわせて頑張ろうと条約というのだろうか、を締結させた。そのために【駅】と呼ばれる瞬間移動装置を完成させてオラリオと繋げた。そして【東京】の人々は地上にも町を作つた。太陽を夢見て死んでいった者もいたらしく、オラリオもそれを許容した。その町の名前は【陽郷】太陽を夢見た先人たちへの贈り物、とかいう感じだったと思う。それから生きているのはクオンと不死とウルフだけ。不死は現在のオラリオにはいるものの姿は決して現さない。クオンにさえも絶対である。現す時は【闇派閥】が現れた時、皆殺しにするためだけに。【駅】は現在のオラリオにはない。どこにあるのか、それは誰に分かるのだろうか。何処かにはあるはずなのに。

「そういうことか。アリスさんよ」

文章の意味がやつと解せた。「ヘステイア・ファミリア」本拠の更に地下に位置するクオンの【格納庫】と呼ばれる巨大な地下空間。ダンジョンとは空間が歪んでいるもので、地形的には現実には存在してないと考えていい場所。だからこそ、巨大な地下空間も存在できるのだ。そしてここは【東京】の人々の工房であつた場所。更なる発展のために日夜研究を繰り返していた場所。人々が去つた後、偽装のために教会が建てられクオンに管理が任された場所であつた。クオンは常識的な神である【ヘファイストス】に協力を請い、ここは彼女の管理する土地になつたのだが、それはどうでもいいだろう。

ここには兵器が収められている。巨大な二足歩行のもの、中型の機

動の軽いもの、そして数多の携行兵器。悪魔にすら致命傷を与えうる、人などは簡単にぶち殺せるものがここには立ち並んでいる。そんな場所の一角に記録が残っており、クオンはそれを読んでいる。それを書いたのはアリスという人物。恐らくは和平の親と呼べる人物なのだろう。

「あの子を呼んだのはお前か」

「結果的には、そうなるな」

久しぶりに訪れた工房。そこを拠点として元【闇派閥】や犯罪を犯した冒険者、危険人物を狩っているのがクオンの後ろにいる【第十七期換装可能型死の天使 アリス】古来よりずっと命を延命し続けた女。

「何故呼んだ」

「ベルの導き手として。そしてお前の緩衝材だよ」

「いらん。今更どんな面でここに居る」

「責任だよ。アレを殺す」

どちらも何か使命を帯びている目であつた。アリス以外はみんな死んだ。そしてクオンも教え子を皆失つた。そして教えたものは全て消えていった。そのためにもクオンは全てをベルに教えて英雄をおしあげること。本物のアリスは、わからない。

アリスは昔、もう何千年も前の話になるが【無の黒衣】を譲り受けて、以来ずっと着ている。どんなに時が経とうと劣化せずその小さい体を覆っている。冒険者からは【死神】と呼ばれているこの女はクオンの古い友でもあるのだ。故にいきなり姿を消したクオンを嫌っている。

「あの子は、いい子だ」

「そうだな」

「あの子は不幸だったよ」

「そうか」

「だから幸せになって欲しい」

「ああ」

「あの子を悲しませたら殺す」

「分かったよ」

アリスは元々いなかっただよりに消えていく。アリスは不死である。あの身体はスペアに過ぎない。無限といってもいいほどに義体は存在する。【無の黒衣】は死んだら転送するようになっており、義体も死んだら消える。遺されるのは【核】のみだ。

「もつと、だよな。鍛えなきやだな」

アリスにも和平にも。クオンは友を救いたい。だからこそ過去を呼び出したのだ。だからクオンも思っている。幸せになって欲しいと。そう願っている。あの二人が巡り会って欲しいのだ。

「……………ふう」

【秋水】から血が滴る。目の前には灰と魔石。強敵ではなかった。割と簡単に倒せた。そして少女を救えた。

「帰らなきや」

少女は帰った。ならば自分も帰らなければ、と歩き出す。

ウルフが取り逃がした個体が暴れる。簡単な話であった。けたたましい雄叫びをあげて三人に襲いかかる。それぞれアマゾネス【ヒリュテ姉妹】の【ティオネ・ヒリュテ】と【ティオナ・ヒリュテ】それぞれ【怒蛇《ヨルムンガンド》】と【大切断《アマゾン》】の二つ名を持つている。そして後衛に【千の妖精《サウザンドエルフ》】の二つ名を持つエルフ【レファイヤ・ウイリデイス】。無論、全力を出せる状況ならば勝てるだろう。しかし、いまは無手。その上で相手は打撃耐性を持っているのだ。手こずるのは必至。そして唯一トドメを差せ

るであろうレフイーヤは腹を打ち据えられて地面に転がっている。

途中から参戦した【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインも自身の荒い剣の扱いによって借り物のレイピアを壊してしまっている。つまり、完全な劣勢だ。しかし、レフイーヤが復活、そしてアイズやテイオネ、テイオナに守られて魔法をぶっぱなす、それが正史であった。これもそうなつていつていたのだ。

しかし、一つ、首が取れた。

「……えっ？」

そんな反応であつたのだ。皆、口をあんどりあけていた。いきなり現れたのは酒場で見た幼女。ベートをぶん殴つたその人だつた。植物、花の姿をした【新種】はアリスが倒した分を含めて三体。【無の黒衣】ではなく【闇の衣】を着ている。見た目は同じだ、ややこしい。【ひひっ】

そんな笑い声が出た。そして残る二つの首も、簡単に落ちた。魔石を回収すると静かに消えていった。

「……あれって」

「酒場の？」

【ロキ・ファミア】の女に動揺を残して。

夜の闇

ある夜の話だ。男、冒険者三人組がほくほくとした、下卑な笑いを浮かべながら夜の路地裏を歩いていた。灯りはない、真っ暗な道であった。男たちは子はいない。妻もいない。酒に依存したただのクズと呼ばれる三人組であった。三人はサポーターから幾らか搾取して帰路に着いていたのだ。自分より弱い者の悲鳴が、愉悦を彼らは享受していたのだ。

何かが落ちる音が聞こえる。ちょうど、人の頭が落ちたくらいの音だ。【怪物進呈】をいくらか行ってきた、サポーターを殺した経験もある男がその音を聞き分けるなどわけなかった。そして直ぐにドサリ、と人が倒れ込む音がした。

「ヒィっ!？」

仲間の声が聞こえた。怯えたような声だ。匂いが鼻につく。焦げた様な匂いと鉄のような匂い。血の匂いなのは確定だろう。ゆっくりと下を見ると、顔だけが見えた。そして体も見えた。分離していたのだ。叫び声ひとつあげずに斬られていた。

「ヒギヤッ」

顔に何かが付着した。血だ。すぐに分かってしまった。そして仲間を殺した者の正体を見た。黒ずくめの、ガキだった。小人族の可能性もある。それほどに小さい、いつも搾取しているアーデのような背格好だった。それを見た途端、笑いが込み上げてくる。

反撃は必然だった。安物のロングソードを相手に叩きつけようとする。しかし、それは簡単に防がれる。ガキン、なんて音もならず切断された。ガキに、自分の剣が。そして本能で分かった。目の前のガキが自分ではかなわないことが。造作もなく自分を殺すことができることも。逃げてても無駄、そんなことも分かってしまった。しかし、分かっている、奇跡を信じてしまった。逃げたのだ。

「助けてっ」

そんな、縋るような声をあげて、だ。自分でも虫酸が走った。こんな声をあげて、自分はアーデと同じではないか、と。アーデに同情も

してしまった。アーデから見て自分は化け物であったのではないかと。自分がアレに抱いた印象通りであっただろう。

だが、それでもアーデとは違うのだ。自分は力がある。そう信じたかったのだろうか。

「うわあっー」

折れた剣を化け物に向かって投げつける。それが予想外だったのか、避けはするものの、フードには当たり化け物の素顔を晒す。

「……チツ」

素顔は、紛うことなき少女だった。しかし、年頃の少女のものではなく、無を顔に貼り付けたような顔だ。一切の感情を表に出していない。ただの道具のようだ。いつの間にか体は動かなくなっている。諦めたのだろうか、もう、目の前で少女が、刀を振り上げている。

「死ね」

痛みは、無かった。

ドチャリ、と首が落ちた。血が吹き出し、身体は完全にもう動かない。首は持ち去られた。

部屋の中には酒があった。【神酒〈ソーマ〉】と呼ばれるその酒はその部屋にいる神によって作られたもの。【ソーマ・ファミリア】本拠の主神【ソーマ】の私室であった。珍しく、酒造りはしていない。少し前に設置したソファに小人族の少女を座らせていた。珍しく酒を作っていないソーマは濁った瞳で少女を見つめる。

「アーデ、だったな」

リリルカ・アーデ、それが少女の名であった。その少女は目の前の神を警戒していた。彼女の主神ではあるが彼女にとって恨みの対象であったからだ。親は身の丈に合わない階層に潜ってほっくりと逝った。それまでもそれから奪われ続ける人生だったのだ。それ

の原因ともいえるものを作った者が目の前にいる、しかし殺したくても殺せない。彼女には力がないのだから。そして【神殺し】は重罪であった。

「何か、御用ですか」

「君を紹介されたんだ。私が最も信頼する者にな」

【ソーマ・ファミリア】にも例外なく団員を束ねる団長がいる。ザニス・ルニトラという【酒守】の二つ名を与えられたLv2の冒険者だ。ソーマが無気力であった時、実権はザニスに譲られた。故に変えたいと願ってもソーマにそれはできない。

「……ザニスですか」

「違う。奴は私に忠誠など誓っていない。いや、この【ファミリア】皆がそうだな。一人だけ例外はいたが」

【神酒】によっても尚、自分を信じてくれた男だ。その人と見ていられなくなったという二人の少女によってソーマの心はこじ開けられた。ヒトにも飲ませられる酒を作ることをソーマは今の目標にしている。

「アーデ、君には願いがあるんだ」

「リリにですか」

「ああ、君にはこのファミリアを潰すファミリアを探して欲しい」

幼女の濁った瞳を見開かれる。それと同時に目の前の神の正気を疑った。確かに腐ったファミリアであることは確かであるし、潰れた方がいいと幼女は思う。しかし、それでも主神が潰すことを目的にするのはどうしてだろうか。

「なんで、そんなことをリリなんかに言うんですか？」

勝手に口から飛び出した。まだまだ聞きたいことはある。言うことを聞かせたいなら【主神命令】で強制的に聞かせればいいのではないか、とかそもそもなんでそんなことを言うのか。

「君がこのファミリアを恨んでいるからだ。いや、私がここを潰したい理由を聞きたいのか？」

「……いえ、いいです。それで？達成すればファミリアから抜けさせてもらえるのですか？」

「君の望みを私が叶えられるなら叶えよう」

「分かりました。引き受けましょう」

では、トリルルカは部屋から出ていこうとする。ソーマはそれを止めようとせず静観しようとした時だ。音はなかった。しかし、リルルカでも感じとれるくらいにはその存在は大きかった。

「ソーマ」

「アリスか。なんだ？」

「コイツ、知ってるか？」

リルルカは自動的に振り返る。自分と同じくらいの背丈であるが自分とは隔絶された存在であることは分かる。声で女性であることは分かり、その手には生首が握られている。そこまでならまだいい。しかし、その顔に見覚えがあるのだ。

「カヌウっ!？」

「ん、コイツの知り合いか」

自分を搾取していた三人組のリーダー的な存在。そんな犬人のオッサンの首が握られていたのだ。それに喜びやら何やらが渦巻いてなんだか複雑な気分になる。

「ええ、そうですけど」

「となると、お前がアーデか。ソーマ、お前こいつに仕事任せるのか？」

「そうだ。駄目か」

「どうでもいい。取り敢えずコイツらは処理した。その報告だけだ」

クオンに報告しておく、とソーマに一言告げて顔も見えない、黒いフード付きのロングコートを身を包んだ存在は夜の闇に消えていく。正体は知ろうとも思えない。

「アーデ、伝え忘れたが接触するなら【ヘステイア・ファミリア】がいだらう」

「分かりました」

出る直前、ソーマはリルルカに口添えする。ソーマとヘステイアは親交がある。クオン経由で色々世話になったのだ。個人的に恩義があるし、それはヘステイアも同様。最近【ファミリア】を発足した

らしいし、さぞ伸びることだろう。

「ウチが試練になるといいのだが」

最近は色々と気になることが増えすぎた。クオンのオラリオへの訪問、ヘステイアとガネーシャ、ギルドが協力して取り組んでいることへの協力。好きであるはずの酒造りは今なお行つてはいるが自分でも良いものを作れたとは思っていない。

彼女らは教会地下の格納庫を訪れていた。ここには教会地下の生活スペースから行けるメンテナンスルームかクオンの工房にあるエレベーターに乗る。格納庫には様々なモノが並ぶが、その一角に生活区画がある。クオンの管理は隅々に渡っている。クオンの創った【人形】シリーズによる管理やクオン自身による兵装の製造。最高効率に調整されたスケジュール。

「集まってもらったのには訳がある」

「訳も何もいきなり連れてこられたんですけど」

「ここは、えつ。なんでここにあれが？」

「久しぶりだねえ」

格納庫内の風景は四角いの一言に尽きる。天井は大型兵器を格納するために階層を抜かれている。片側、格納されている方とは逆の左方向に階層構造が採用されている。格納庫内のみで階段とエレベーターが同時採用されており、階層ごとに何が置かれてるかはあまり変わらない。そしてこの格納庫の一つ上の階層、つまり教会地下の一つ下にはこのテクノロジーをふんだんに使われた畑がある。たまに人形と共同での収穫している。

「アリスにこの紹介をするためなのと個室、要らないか？」

クオンの言葉にベルとアリス、ヘステイアの三人は顔を見合わせる。アリスの寝泊まりは大体はメンテナンスルーム、ベルはソファでヘステイアはベッド。クオンは不明である。

まあ、それはそれとしてプライベートな空間ができるのは喜ばしいことだろう。

サポーター

部屋割りが決まった。利便性を求めるために全員が最上階の部屋になり、ヘステイアはもう深夜であるから眠った。クオンと和平、ベルは最下のトレーディングルームに居た。周りの光景は格納庫の雰囲気とは全く違った。というより別物と言っても過言ではないだろう。白を基調とした未来的な雰囲気のところではなく、洞窟。それも霧が周りを覆って視界を邪魔する。そうダンジョン第十階層にそっくりなのだ。目の前にはクオンとアリスがいる。どちらも木刀を持って。

「ここは、」

トレーディングルームの設定でダンジョン第十階層が選択されているだけだ。設定したのはクオンである。これから向かうべき階層ということと周りが見えない状態で襲われるという状況を再現した。

数分である。数分でトレーディングは終了となった。終わりはベルの気絶だ。クオンがアリスをジト目で見る。

「新しい義体に興奮しすぎたか？」

「いや、すまない」

アリスに比べてもベルは些か未熟にすぎる。アリスの剣術は我流であるがしっかりと古流剣術の流れを汲んでいる。故にか抜刀術でもなんでも器用にできる。天才肌なのである。対してクオンは凡人である。途方もない年月を鍛錬に注いだからこそ、速さも鋭さも他に引けをとらない。他にも魔力や霊力、妖力などなど力の使い方に関しても最高のものである。どれにしても扱い方とそれに関わる技術ならばクオンが始祖だ。そんなクオンを師につけているベルは恵まれているのだろう。

「どうしよう」

「回復魔法でもかけるか。お前は手加減でも覚えろ」

「はい」

負い目があるのか目が泳いで生返事になっている。クオンが適当な詠唱を挟んでベルを暖かい光が包む。瞬の後、まあ特に何も変わらない。特に苦しそうな顔をしている訳もないので当然ではある。

設定を解いた後のトレーニングルームは格納庫の白を基調とした機械的な施設とは全くの逆。黒い機械的な部屋である。出入口である扉の近くの壁に端末がある。それに接続できる端末を取り出して操作できもするが。

「ここって何なんだ？」

「話すと長くなる。後で記録見せてやるよ、ここの設備も見たいだろ」
「ああ、よくは見てなかったな。頼む」

格納庫を見回る前にベルを運ぶ。ベルの部屋ではなく談話室でローズ、「人形」のうちの最初期型の一体に任せて最下に降りる。格納庫というだけあって様々なものがしまわれている。文明レベルにあわないようなもののみである。馬車は馬車でも金属でできていたり、列車や機関車もあったり、リニアモーターカーなんてものもあった。乗り物関係はあらゆるものが揃っていた。そして何よりも驚いたのが過去の人物が転送技術を完遂していたことであった。クオンによると「駅」と呼ばれていたらしい。転移先は選べはするものの何処にも行かない方がいいと言われた。何処にしても今のアリスでは死ぬと。

ならば、とアリスはクオンに提案する。アリスもクオンに師事したい、ということであった。クオンは少し悩んだ後、承諾してくれる。

移動したのはやっぱりトレーニングルームである。クオンにデータを貰っていつでも閲覧できる状態にある。

簡単な設定をクオンが行う。今のところクオンしかそれを行っていないがちゃんとやり方は教えられている。設定された後、すぐに視覚的にそして地形ごとフィールドが変わる。

「ベルの、屋上？どういうことっ」

「後でデータ見りゃあ分かる。慣らすならいつでも付き合っただけでやらな」

クオンが取り出したるは深紅の刀身をもつ高周波加工された刀。そしてその小さい体をベルの腕を覆った黒いモヤ、ドロドロとした何かが溢れ出す。

【闇】と呼ばれる世界の本質。精神を蝕み、最悪ヒトを化け物に墮とす

最悪といっていいほどの力。ヒトの恐怖を具現化し、ヒトの力によって表面化するもの。それがクオンの身体に溢れる。そしてそれによりクオンの藍の瞳は黄色に変質し、重圧感が増す。得体の知れない化け物を相手にしているかのような、後にも昔にも味わうことのないものであろう。

アリスも愛刀を抜き、構える。クオンは力を抜いたように特に構えはとらない。いや、それが彼女の構えなのだろう。突っ込めばやられる、背後に回っても同じことだ。ならばどうすればよいのだろう。どんなに考えようとも分からないことだ。アリスに遠距離攻撃手段など皆無である。飛ぶ斬撃などは以ての外。無敵とすら思えるクオンに飛び込めすらできなかつた。

長い時間のようで短い時間のようだった。クオンは余裕そうは顔で、アリスは張り詰めた顔でじっとお互いを見つめる。

「どうした、義体の動作確認だぞ。来ないのか？」

「お前が無敵すぎるんだ」

義体の動作確認、そんな名目ではあるがなまじクオンが強すぎるのだ。愚直すぎるベルならば別だが中途半端に賢いと近づけすらしい。どんなチンピラでも愚者でも今のクオンには近づけないだろう。

「ならあ、こっちからだなあっ！」

わざとなのだろう。わざと速く移動させず、重く移動する。ズンっ、と持ち手の右のみでアリスに迫る。

「重っ、ぐう」

動けなかつたおかげで力を溜められた。それでも重く感じられ受け止められたのもギリギリであった。連撃ならば、すぐでなくとも次は弾かれるだろう。そしてトドメを刺されて終わり。高層でないビルくらいの大きさの兵器くらいなら投げてぶった斬るくらいの胆力はあるはずなのだが。

「気を取られすぎだ」

そっと、腹に据えられた左手。その掌には魔力が宿り、熱が感じられる。

「なあっ！」

「もう遅い。【ダークファイガ】」

爆発する。闇より生まれた炎は純粹なものより火力が高いものだ。変質し、闇に存在する恐怖などの精神的な力を吸って力を高められた魔法。闇魔法と呼ばれる威力だけなら最高の魔法だ。

それによりアリスが吹っ飛ばされる。そこからのクオンはただ突っ立っているだけだ。トドメを刺す意味はなく、ただの稽古である。ならば一方的にでも、アリスの体に教え込むのみのだろう。

「よし、座学はまだだからあ。そのカラダに教え込んでやろう」

【魔力応用術】はまだアリスには使えないものだ。それに実践のみでは教えられないものでもある。今クオンが教えるのは基本的な身体の使い方。それに魔力の使い方だ。

「ぐっ、まだ頼む」

「おーけー。【舞妖】も抜け」

戦うのは自分のすることである。そう、アリスは思っている。クオンとはとある事情で直接は干渉できないようである。できるならベルを弟子としないだろう。

【ファミリア】の団員ならば滅多にしない者はいれど【ステイタス】を更新する。更新するとこれまでの経験が反映されてステイタスが成長する。

ローズに看病されていたベルだったが、終わるとローズは足早に仕事に戻っていく。入れ替わるようにヘステイアが入ってくると成り行きでステイタスを更新することになる。

「ベル君」

「なんです？」

「危ないことしてないかい？」

その言葉にベルは意味がわからないと反応を示す。ダンジョンに

潜ること、では無いようだ。ならば別のことであるはずだが特に覚えはない。

「そっかあ、終わったよ」

声のトーンが下がったような気がする。終わるとヘステイアもまた足早に仮眠室を出ていく。ベルはそれを見届けてなにかしてしまったのか、と首を傾げステイタスを写した羊皮紙を見る。

ベル・クラネル

L v 1

「力」 G 361

「耐久」 H 216

「器用」 F 421

「敏捷」 D 637

「魔力」 S 999

魔法

スキル

【始祖の教育】 早熟し大成する。常に精神力を回復し続け魔力の値を固定する。干渉を妨害する。

【暗闇への導き】 成長する。練度によって使える能力が変化する。

現在《なし》

導き

【魔力】とははるか古代より存在する精神に宿るエネルギーだ。精神があれば多かれ少なかれ必ず存在するものでそれを扱うには少しの知識と研磨が必要。その扱いを極めるにはエルフであつても三十年、ドワーフならば百年は必要となる。ヒューマンなら十年であつたり二百年であつたり個人差がある。

ベルに教えた年数は五年。クオンが教えたかいあつて【応用型】までなら極めたに等しい。ベルには才能はなく、ただの凡人であつただろう。彼は純粹であり助けてくれたクオンに敬愛の念を抱いていたせいもあり意欲的に励んでくれた。

まあ今はそんなことはどうでもいい。クオンについてならばいずれ話す時が来るだろう。

和平は飲み込みが早いのである。【基本型】はもう大体できるようになった。【探知】は扱い方と自身の魔力の多さに比例するのでまだまだひよっこではあるものそれ以外ならば一人前にまで成長している。昔、ダンジョンの上にあつた集落にて使われたサイボーグと魔力を統合された技術。名称は魔導装兵であつた気がする。それを二人のアリスの義体にも流用し、量産もしている。和平の方の義体は量産しているものを今のところはそのまま、である。いずれは専用のもを作らる。アリスが拠点としている【格納庫】の更に地下はヘステイアも知らない場所だ。

「おう、帰つてたか」

無言。彼女の部屋の先に義体のスペアが大量に立ち並ぶ部屋がある。そんなものは見ない方がいいだろう。不気味、というのが何よりも勝るだろうからだ。見たいとも思わないが。

何をやってきたかは知っている。協力関係、という程でもないが親交のあるソーマから聞いているからだ。今日はベルとエイナがデートをする日。和平は変わらずダンジョンに潜っている。応用術の肩慣らしだそうだ。

「随分と違うな」

「……何が？」

「和平方から聞いた話とは全く違うなあ、とな。全然フランクじゃない」
「永く生きてたらいくらでも変わる」

「そうかあ？ 私なんて何にも変わってないぞ」

一方は何千年も生きたサイボーグ。もう一方はもういくら生きたのか忘れた程に生きている何か。どちらも不死であることには変わらない神以外の存在だ。

「貴方も変わっているだろうよ。忘れてるだけで」

「まあ、だろーなー。で？」

何か用があるのだろうか？とニタニタ笑みを崩さない。それに対してやっと表情をアリスは歪めた。本気で嫌悪感を抱いているのだろう。

「リリルカ・アーデ」

「あー、ソーマのところの。明日にはベルに接触してくるであろう少女ちゃん？」

「話してないんだ」

「話すとサプライズにならないだろうよ。私はアイツらを成長させたいんだよ」

「黒幕だな」

「私がここに存在する理由を考えたら分かる」

クオンにとつたら世界のこと以外はいつでもいい。気まぐれに降りることと仕事で降りることは全く違うのだ。観光目的と世界を守る目的、彼女にとつては同じことではあるのだが。

陽の光が届かず、照明も最小限で部屋にはソファと使わないベッドしか存在しない。アリスとクオンは隣同士に座っている。見た目は完全な幼女で姉妹のように見える。まあ、それにしているいつ殺し合いが始まるか分からないが。

「どうでもいい」

アリスは一言でクオンの言葉を片付ける。確かに、とクオンは笑い飛ばす。自らが存在しているなら存在理由などどうでもいいだろう。存在してしまっているならば今すぐそれを断つか存在し続けるしか

ない。だからこそ、生き物は生き続けるしかない。

「それもどうでもいい。理屈も屁理屈もどうでもいい」

「そうか。なら、お前は どうする?」

「英雄を育てるために協力する。そのためならいくらでも殺すし情報も引つ張ってくる」

「仕事じゃない。『お前が』何をしたいのかだよ」

「……もう十分生きた。後は義務を果たし続けるだけ」

「義務を果たすなら権利を果たしてもいいだろ。私欲を満たしてもいい」

「その必要は無い」

「ある。でなきや『人』じゃない」

「なら人じゃなくていい」

モンスターでも悪魔でもなんでも良い。暗にアリスはそう言った。人でなくでもいい、英雄を作るなら世界を守るならば全てどうでもいい。昔から、というわけでもないが久しぶりに会った時には殺されかけた。

「まあそれでもいいか」

無論、返り討ちにした。そして変わりように吃驚もした。一度殺した後には協力関係になった。

「会わなくてもいいのか?」

「会うべき時が来るだろう」

「ほいほーい」

軽い返事をして煙草を取り出す。節制はできるものの元々はヘビースモーカーであるクオンは口から煙を吐き出す。その煙が嫌いなアリスはクオンから離れる。そのまま何も話すことなくクオンは部屋を出る。隠し部屋のなこの部屋の出口は格納庫の最下、それもクオンかアリスが許可した者しか入ることができない仕様である。

オラリオのとある宿屋。リリルカ・アーデが宿泊する安宿だ。ソーマから依頼された冒険者を探して数日、未だに見つからずだ。資金援助は受けており、サポーター業は現在やっていない。彼女を搾取していた三人組は既にアリスによって殺害され、彼女を害する者はいないと言っている。そんな彼女の部屋にはクオンがいた。そしてリリルカはいない。リリルカに贈る資料とアイテムをまとめて申し訳程度に置かれた机の上に置く。

しばらく待っていると多少立て付けの悪い扉を開いてこの部屋に泊まっている本人が姿を現す。そしてクオンを見て警戒心を跳ね上げさせる。逃げようとしても境界によってそれは阻まれる。

「落ち着け」

その一言でリリルカのごちやまぜになった頭の中が強制的に整理された。そして無理やり情報を容れこまれる。クオンが自分の協力者であること、机の上に資料があること。そして簡単なクオンの情報だ。

「何か御用で？」

混乱することも無い。そんなことをされたら面倒なのだ、そのためにも簡単に頭をいじった。警戒を何も無かったかのように解いて机の上に整理された資料を取る。

「情報を持ってきた」

「ヘステイア・ファミリア」のものです。ありがとうございます」
「役立ててくれ」

「ヘステイア・ファミリア」と「ソーマ・ファミリア」になんとか関わりを持ってもらいたい。そう思っただけの行動だ。人と会うならば頭をいじることが出来るクオンの方が適任で、アリスだと色々問題がある。

「…ふむ」

「どうだ？」

「…まだ居たんですか」

「おう。お前を少し鍛えたいと思ってね」

パチンつ、と指を鳴らすと簡単にリリルカの頭の中が掻き回され

る。洗脳とでもいえるものだろう、R指定な展開にはならない。クオンの思い通りに話を進められるため交渉が面倒な場合には使う。精神が桁違いに強ければ耐えられるものになっている。それでも直前にも構えていなければ抵抗はできないが。

「それは、有難いですね」

「うんうん、それでいいんだ。覚えてなきやついて行けなくなるからな」

「……そうですか」

リルルカは目の前にいるクオンを冒険者として見ているのだろう。カヌウ達を殺したアリスのことも同様に。それは別に改変はしなかった。強さだけで言うならばこの二人の方が格段に上だからだ。

「君死にたまふことなかれ、じゃあ勉強だ」

「……はい」

自分で書いた分厚い本を数冊とどこから持ってきたか、学校にあるような机と椅子を並べてそこに座るように促す。

翌日の朝。「ヘステイア・ファミリア」本拠、質素な生活スペース。ヘステイアは既にバイトに出かけており、和平は新調した装備を装備しているベルを待っている。クオンは新しい義体を作っているところなのだとか。もう少しらしい。

「似合ってるじゃないか」

「やめてよ」

細い身体ではあるが適度に鍛えられている。エイナから貰ったというグリーンサポーター、そして名前が特徴的な軽鎧。兎っぽい見た目にそれらは似合っている。和平は、まあいつも通りである。

そんな二人はバベルに向かってさっさと歩く。先日のことについて語らいながら向かっていく。問題はバックパックの容量だろうか。直ぐにいっぱいになって魔石を砕かねばならないのがかなりの

ストレスである。エイナやクオンからも言われていたがサポーターを雇った方がいいだろう。

そんなことを話していると何やら声が聞こえた。

「その白髪のお二人！」

面倒事かと無視していると少し、怒気も混じった声になる。しつこいなあ、と振り返ると小人族のような獣人がいた。栗毛で自分と同じくらいのバックパックを背負っている。

「サポーターは要りませんか？」

美味しいものを食べる

リリルカ・アーデのこれまでの人生は散々なものだった。今までも、これからも同じことであると思っっている。これまでは「ソーマ・ファミリア」の冒険者に搾取され続けて今もソーマに、クオンとかいう小人に利用されている。ファミリアがなくなったとしても彼女は利用され続ける。冒険者は等しくクソの塊のようなものだ。彼も彼女も同じだとリリルカはそう思っっている。

「二人ともお強い！」

でも自分も同じようなものだと思っっている。でも自分では死ねない。希望がまだあるから、こんなリリでもまだマトモに生きられると思っっているから。クソの塊でも踏み台にできるならし続けて自分だけ昇ってやろう。そう思っって愛想を振りまき続ける。自分でも反吐がでるが、仕方ないことだと割り切る。

現在、パーティを組んでいるのはベル・クラネルという純朴な少年と何を考えているか分からないアリスという小人族。少年はお人好しで鈍感。何かを盗むなら簡単にできそうであるがもう一方のアリスが見逃すとは思えない。事実、ベルの取りこぼしたモンスターを瞬きする間もなく斬っっている。

「優秀だな」

そう、アリスが零す。それにベルが同意してリリルカはそれを愛想笑いで返す。内心は毒づいているが。始終無表情で感情を掴めない彼女はどうせ自分を見下しているのだろうと嫌悪感を抱く。最近出会った小人族にはまともな奴がない、つまりはコイツもまともではないのだろう。さっさと抜けてしまいたい、そう思う。

「ベル様、あのモンスターの剥ぎ取りをお願いしますか？リリりでは届かなくて」

「分かった。これでやればいいのか？」

「はい」

キラアアントの剥ぎ取り、アリスは興味がないようで周りを警戒している。その隙にリリルカはベルのナイフの盗難に挑もうと思っった。

戦闘のほとんどをベルに任せてサポーターの作業を一部手伝う。そして今は何もしない。本当に気分で何をやるのか決めているのか、それとも何か意図的なのか。ベルが魔石をとるのに苦戦しているところで腰のナイフを抜き取る。

成功を喜ぶ暇はない。帰る時にはアリスが戦闘を担当し逆にベルの出番がなかった。地上に出た後、リリルカが換金を担当する。

「三万ヴアリスうう!?!」

リリルカとベルが予想以上の成果に喜びのあまり叫ぶ。アリスは依然興味なさげにベルの隣に佇んでいた。その後は正式契約の話で翌日にバベル前の広場にて待っていると言葉を残して逃げるようにその場から去る。目指すはリリルカが盗品や遺品を換金しているノームのお爺さんが経営している店。アリスとベルがギルドに入っていくところは確認した。これで換金を邪魔するのは有り得ない。

「……ふむ、逃げ切れると思っっているようだな」

腹部に痛みが走る。何かで刺されたような、それにしては焼ける感覚も感じる。腹部を見ると片刃の刃が飛び出していた、声は恐らくアリスのものであろうか。簡単に、繰り返し返されたような感覚を得る、刃に力が入れられてリリルカの体が宙に浮かぶ。

「……え」

共にギルドに入っただけだったところは見えた。リリルカを疑っているなど思っていないかった。襲撃者の顔を見ることはできなかった、その前に壁に叩きつけられて気を失ったから。

「ベル」

「あ、アリス!どこ行ってたの?ってそんな場合じゃないんだ、ナイフがなくて」

「そら、落としてたぞ」

ベルに「ハステイアナイフ」を投げ渡す。ベルはそれを慌てて受け取ると真っ青だった顔色を一瞬で晴らす。

「あ、ありがとうっ!」

「ん、たまたまだ。それよりそろそろ帰った方がいいんじゃないか? すまんが私が用があつてな、夕飯までには帰れないかもしれん」

「そうなの？」

「ああ。夕飯はヘステイアと食べるといい」

アリスは表情を崩さない。そのままベルの頭を撫でると路地裏に向かつて歩き出す。ベルはその姿に不安を抱くが彼女には彼女なりの都合があるのだろうと自分も本拠に帰っていく。時間は夕方、今まさに太陽が沈んでいく頃合いであった。

リリルカが目覚めたのは薄汚い天井が見える店のようであった。グツグツと何かが煮える音、そこから中から何かを啜る音と美味そうな匂いが立ち上っていた。

「起きたか」

「あ、あなたはっ」

「お前の招いたことだろう。さっさと注文しろ」

起きると傍にいたのは襲撃者であろうアリス。その表情には依然感情の火が灯っていないように見える。アリスに指さされた方を見ると壁に共通語で書かれたメニューが貼り出されていた。ラーメン、焼飯、餃子、ライス。それにAセットにBセットなど、その下にはセットメニューが書かれている。

「ここは私の奢りだ」

「……なら遠慮なく」

アリスの元には既に注文したものが置かれている。丼の中にはスープ、その中に麺や野菜など豊富に食材が入れている。そして他にも丼に入れられたライス、二つの平皿に入れられた焼飯と餃子。グラスには水、ではなく酒が入っている。清酒だろう。それら全てをリリルカは知らない。得体の知れないものを食う気にはなれないが頼まなければ何をされるか分からない。

「らーめんというやつを」

「あいよ」

リルルカが注文するとアリスに大将と呼ばれた男が慣れたように作業をこなす。器にスープを入れた後麺を湯切りしてスープの入った器に入れる。下準備は開店前に全て行っており、あとは材料を器に入れるだけなのだ。あとはトッピングをしてリルルカの前に出す。

「へいお待ち」

「ありがとうございます」

目の前に出されたらーめんなる料理。食器を探すがスプーンのようなものと木で作られた割れるような棒しか目に入らない。

「食べ方が分らんか」

アリスの方を見ると見本とばかりに棒とスプーンを器用に使ってらーめんを食している。

「大将、替え玉」

と言った直後、アリスは棒に手を伸ばす。

「これは割り箸。こうやって割って使う。あとこれはレンゲだ。使い方は見せたな」

アリスに割り箸とレンゲを渡される。アリスは大将から替え玉を入れてもらった器を受け取ってもう一度麺を啜る。

一方のリルルカは割り箸で悪戦苦闘する。レンゲはスプーンと同じ、扱いは簡単であるのだが割り箸はそうはいかなかった。マトモに食べ始める頃にはアリスは焼飯もライスも餃子もラーメンも食べ終わる頃であった。つまり、麺は伸び伸びである。

「美味しい」

それでもリルルカはそれを美味しいと感じる。今までは殆ど無いに等しい収入をやりくりしてどうにか食い繋いでいた。そんなことではマトモなものなど食べられるはずがない。だからでもあり、この店がオラリオで唯一ラーメンを提供する店だということもあるだろう。安いのにそれを反比例するが如く美味しいのだ。アリスが路地裏を歩いている時、たまたま見つけたのは運が良かったというべきだろうか。それからはベルやヘステイア、クオンにも紹介して度々来ている。常連のようなものだ。

「替え玉、するか？」

替え玉とは先程アリスがしていたことだろう。ラーメンの麺を食べ終わった後、もう一度麺を入れてもらう。

「はい、お願いします」

「大将に言え、私はできん」

「あ、確かに」

アリスの発言に納得して大将に替え玉をお願いする。無愛想であるが大将は快くそれを引き受けてくれる。そして追加注文でライスも頼んだ。これもさつきアリスがやっていたことの真似だ。ライスをラーメンのスープの中に入れていた。

そうやって替え玉したラーメンは伸びていない分、さつきのものよりも美味かった。割り箸を使えるようになった達成感もあったのだろうか、それでも十分である。

自己満足

二人の幼女がラーメン屋のカウンター席に座ってラーメンを食す。二人とも、ラーメンは食べ終わっており餃子を頼んでそれも食べ終わったところだ。会計の前にアリスがリリルカに話しかける。

「どうだった？」

「美味しかったです」

「だろうな、ここはオラリオでも唯一のラーメン屋だ」

見つけるのには苦労したよ、と無表情のままハッハッハと笑い飛ばす。表情筋が役割を果たしていないように見えるが情緒はまだ存在しているようである。

「で、腹も埋まったところで本題なんだが」

会計を済ませて店を出る。全面的にアリスの奢りであるがこの店は安い上に美味しい。だからこそ冒険者でも一般人でも常連を獲得しており、店主の寡黙さも職人感が出て良いと思っている。だからアリスは全メニユーを制覇した上でリリルカの分まで出せるのだ。これでも二万も超えないのは優しすぎないだろうか。

「……なんですか？」

「ベルは君の犯行に気づいていない。私も教えていないしな、しかし許すわけにもいかん。君の所属は「ソーマ・ファミリア」だったな」
「ええ、そうですが。それがどうしたんです？」

リリルカはイマイチ、アリスのことが読めない。表情からも口調からも、全てが均一すぎるのだ。感情の起伏がない、とでもいえば良いだろうか、人の機微を読むことに長けているリリルカでも彼女は読めない。

「……それがな、私も悩んでいるのだよ。確か、サポーターとは待遇が悪かったのだよな。それに「ソーマ・ファミリア」の悪評は私の耳にも届いている。ともすれば搾取もされている恐れはあるのだよな、なれば君を罰するのは私の使命に反するのだよ」

うむうむ、と夜の闇が辺りを包む路地裏をリリルカを連れて歩く。リリルカはというと逃げれば追いつかれて何をされるかも分からない。

い。それにリルルカの体躯と強さだと冒険者に絡まれると終わりだ。なので素直に後ろをついていく。

言葉の全てを聞いたがなんとも信じきれない。本人の声色の問題もあるが今までそんなタイプの冒険者を見たことがなかったこともある。

「なので君の事情を聞いてみることにする。その後にはスティア、これも君の遭遇したことのない神だろうな。そいつに会わせる」

アリスとしてはベルが悲しがることは避けたいし、クオンの思惑から外れるのも避けたい。クオンはベルを英雄に昇華させるのが目的でアリスにも何らかの意図があるのだろう。全てが連なりすぎて裏になにかあると思ってしまうのが妥当なところでその糸を操れるような存在は今のところロキかクオン以外には思いつかないしロキには動機がないだろう。

「話してくれるか？今だけは搾取する側に回らせてもらおうよ」

チャキン、とりルルカにブレードの反射光を見せる。僅かばかりの魔石灯によってブレードが纏う蒼い電流のようなものがリルルカに腹部の痛みと恐怖を思い起こさせる。

「わ、分かりましたよっ」

「それは良かった。そら少しで教会に着くよ」

リルルカの目に見えてくるのは資料にあつた廃教会ではなかった。きつちりとした修繕が行われており、蔦が張られていた壁は綺麗な白。ステンドグラスがあつた場所には元の綺麗なものに変わっている。小さいものであるからか鐘はないものの元々の荘厳な雰囲気は取り戻している。

「どうした？」

「あ、ああ。すみません」

ガチャリと両開きのドアをアリスが開ける。リルルカはアリスに呼びかけられると急いで追いかけて、中の様子にも驚いた。中央の通路に両脇にベンチのような横長の椅子。教会の見本のようにであるが奥は階段が隠されていること以外は何も無い。

「むう、ベルはもう寝ているかねえ。リルルカ、ここで待っていてく

れ」

逃げたら、分かっているな？と言いつつ残して隠し階段から地下に向かう。そもそも、リルルカは「ヘステティア・ファミリア」から逃げられない。クオンとかいう小人族にソーマ、そして黒コート、黒フードの小人族。リルルカの周りは完全に包囲されていると聞いていい。

「今帰った」

地下室に入ると迎えるのは幼女。二人の内、二人ともである。ベルはいないようなのもう寝ているのだろうか。

「遅いぞ」

「おかえり！アリス君」

「クオン、話があるんだが」

「む？リルルカのことか」

「なにか仕込んだだろう」

大当たりー、とクオンは軽口を叩く。そのやり取りにヘステティアが首を傾げたのでアリスが今日のことを説明する。そして、クオンに説明を求めた。

「ああ、そのことは【ソーマ・ファミリア】の現状から話さなきゃいけないな」

【ソーマ・ファミリア】の状況は面倒というか最悪というか、全てはソーマの無関心から始まった。ソーマも初めは善なる存在で酒を作るためにファミリアを作ったのはいいが眷属へのご褒美に【神酒】を与えてしまったのがいけなかった。眷属はそれに依存してしまい、ソーマの無関心に繋がった。そこを今の団長である【ザニス・ルニトラ】に乗っ取られた、というのが大まかな概要だ。ソーマにはそれでも忠実な眷属がいた。親としてソーマを愛している者がいた。その者がクオンに頼ってソーマの心をこじ開けたのだ。

「それで私はソーマを助けているって訳だ。一度助けちゃってから腐れ縁みたいな感じだな」

「それでリルルカは巻き込んだのか？」

「そうなる。まあ生き残るための最低限はもう仕込んであるから大丈夫だろ」

「へえ、で？その子は今上にいるのかい？」
「らしいな」

クオンは既にリリルカの位置を知っているようだ。今までは気を緩めていたのだろう、ヘステイアは話がしたい、とアリスにリリルカを呼んでくるように言う。それを聞くとすぐにアリスは階段を上がっていった。

「クオン君。アリス君はどこにいるんだい？」

「格納庫の地下だよ。バレやしないから大丈夫」

「それならいいけど」

ヘステイアはクオンに本物の方のアリスの所在について聞く。最近ではヘステイアの目にアリスは引つかかってくれない。せつかくの眷属なのだからもつと関わってきて欲しいものである。所在について聞いた後、思考に意識を沈めているとアリスがリリルカを連れてきた音を察して意識をサルベージする。

「君がリリルカ君だ」

ソファは二つ。一方はヘステイアとクオンが、もう一方にはアリスとリリルカが座る。見事に幼女しかない空間である。

「はい」

ヘステイアの言葉にリリルカは力なく答える。ヘステイアはお人好しではあるものの、神であるから人の嘘は見破れるし嘘でなくても何が意図かは頑張って考えれば可能だ。

ヘステイアは真剣な視線をリリルカに突き刺す。

「……さて何を話せばいいのかな」

「おい」

「いや、こういう雰囲気慣れてなくってさ」

「そこはこれからのことでもいいだろ。リリルカの処遇をどうするか、とかさ」

「それはクオン君にも責任はあるだろー？泳がせてたんだしさ」

「まあそうだが。つまり何もすることはないってことでもいいのか？」

その言葉に一同が頷く。止められるものならクオンが止めていたし、ダンジョン内でもアリスが止められた。そんなもんは簡単なこと

であるのだ。

断頭台にでもいるような気分であるリリルカには張り詰めた雰囲気から一変してホンワカとした雰囲気になったのに驚いた。

「よし、事情も把握したしリリルカ君は今日からここに住んでもらおう」

「それがいい」

そしてリリルカの承認も得ることなく話が進んでいく。これでは拒否したとしても強制的に連れていかれる気しかしない。

「リリルカ、もう諦めろ」

「・・・はい」

アリスのど低音の声。マジトーンともいえるそれをリリルカは向けられて屈することになる。ニツコリと笑っているつもりなのだろうが無表情なので怖い。

お風呂

目が開くと真っ白い天井が見える。夢ではなかったのか、と喜びと苛立ちの混じった複雑な感情を胸に身体を起き上がらせる。ベッドと机、その上にある自分のバックパック以外に何も無い、殺風景な部屋だ。そして頬をつねってみる、それで夢ではないことを再確認する。

「おはようございます、リリルカ様」

寝ぼけた視界、それによつてか誰かいるのを察知できなかった。そんな時に聴覚に訴えかけるのは女性の声であった。

「うわっ。えつとどなたです?」

無論、それに驚くだろう。リリルカに声をかけた本人はメイド服に身を包み藍色の神が腰まで伸びている女性だ。丸椅子に座っている姿からは気品が漂っているのが分かり、その顔は無を貼り付けたような顔であることが何よりも気になる。

「私は人形シリーズのうちの一体【藍】と申す者。この度は貴方様の世話を頼まりましたので引き受けました」

凍りついたような表情と声帯、その割には流暢に言葉が出てくるようである。言葉の中で意味不明な言葉も混じっていたが気にする余裕はなかった。

「その藍、さん?はなんの御用でここに?」

「貴方のお世話をしに」

「いや、それはなんでですかって聞いていますんですけど」

「我が主であるクオン様が望まれたからです」

「ああ、そうなんですか」

リリルカは昨夜、部屋に案内されるとすぐに眠ってしまった。そのためか藍は先に風呂に入ることを推奨してきた。リリルカの知識に風呂なんてものはない、それが故にどんな場所か興味を湧いた。どうやってもこの人間（人間っぽくない奴もいるが）はリリルカの世話を焼きたいらしくこれにも大した意味は込められていないのだろう。

リルルカの呆れたような声は必然だろう、リルルカはこんなお人好しには会ったことがない。

「分かりました、案内してください」

「承りました。着替えはどうなさいます？」

「……任せます」

リルルカのバックパックには着替えは入っていない。今の服を着続けるのは衛生的に悪いだろう。下着は持っていくがそのほかはどうすれば良いだろうかと悩むことになる。

「であれば私たちの所有するこの服でいかがでしょうか」

これしかないのですが、付け足されそれ以外に手段はないと悟るとリルルカは承諾する。

「その後はクオン様が用あるみたいなので訓練所まで来てくれ、どうぞです」

「はあ、分かりました」

リルルカは嫌悪感を示すが藍は気にせず最下に降りるとプシューという音と共に床下の扉が開くと自動的に動く床に落ちる。ガタガタと気持ち良い揺れとともに洞窟のような場所に出る。

「え……、ここは」

「温泉ですよ。ベル様やヘステイア様もたまにここに入りに来ているのです」

「まじですか」

広大すぎる、そんな感想がリルルカの頭に広がる。この深さならダンジョンに繋がるのではないかと思うがそんなこともないようだ。目の前に建っている建物は高さは街の縦長い建物と同等、横幅はどことも比べるべきではないだろうほどに広い。建築様式はリルルカには知らないものであった。白を基調としたオラリオにないものだ。

中は脱衣場が男女で分かれているが肝心の温泉は混浴である。入る男性はベルのみであるので水着かバスタオルを巻くのはいらないだろう、とは藍の言葉である。あの紳士ならば勝手に入ってくることは有り得ない。

「ぎ、入りましょう。身体の傷も癒えますよ」

そんなことを言う頃には藍は既に服を脱いでいた。ひとつ言えることはリルルカより全てが大きいことくらいだろう。

「……はい」

何故かの敗北感を胸にリルルカは藍に従う。

「クオンさん、ここどこですか？」

「そんなのはいいからさ、こっちだよ」

音は立てるなよ、と本拠の中なのに隠密を強要してくるクオンとそれを追うベル。暗く狭い洞窟、こんな所で何をするのだろうか、どこに向かうのだろうか、と興味が湧いてクオンについて行っている。

「覗きですか」

思い当たったのがそれだ。位置関係的に言うともうそろそろ温泉のある場所だ。格納庫の場所を教えてもらった際に温泉に至る別口を教えてもらっている。あそこは丸々と洞窟を改造した施設だ、それはクオンが行ったらしい。

「そうだけど？」

「なら帰りますね」

「ちよつとまってくれ」

曇りの無い瞳でそう答えたクオンに呆れ果てて立ち上がる。隠密などする気もなくしたベルはクオンの言葉に耳を傾けることなく道を戻っていく。

「ちよつとでいいんだ、な？」

「あの人に殺されますよ」

ベルが名前も姿も知らない人のことだ。クオンから話を聞いた限りだと随分とおっかない人らしい。

「それもそうか。でもな、これは浮気判定には」

「どちらにしても最低な行為ですが」

「うう、これは男のロマンだな」

「あなたは女性でしょう。それに最低な行為をロマンと呼ばないでください」

ベルの積み上げてきたクオン像が音を立てて崩れていくのを感じる。祖父のダメなところが感染ってしまったのかもしれない。

「では、僕は帰るんで」

「まあ、見に行ってもそこまで収穫ないか」

よし、帰ろうと思い直してくれたクオンと共に格納庫に戻る。それまでにもベルはクオンに冷たい言葉を浴びせていたが。

「弱すぎないか」

「えっと、まだ打開策はあるはず」

和平とヘステイアがやっているのはオセロである。和平が黒、ヘステイアが白で四つ存在する端は全て黒に、僅かに残る白ももうどうにもならない位置にある。つまり、どうやっても次の一手で和平の勝ちが決まるということだ。

「(うん)で」

「よし、勝ちだ」

諦めたように駒を置くヘステイアと勝ちに少しの喜びと共に駒を置く和平。

「アリス君は手加減を知らないな」

「うむ、知らないな。君もこういうことには強くなっておいた方がいいぞ」

「むー、分かっているけどさ」

「分かっているならいい。もう一戦するか?」

「うーん、そろそろ時間かな」

ヘステイアは時計を気にする。そろそろバイトの時間らしい、それが分かると和平は道具を片付け始める。

「じゃあ行ってくるね」

「行ってらっしゃい」

随分と朝早くから行くものだ、と思うがクオンによるとヘスティアはヘフアイストスに借金があるらしい。それを返すために二つバイト掛け持ちしているのだとか。

「さて、と」

和平もそろそろダンジョンに行く時間であるのだがベルとリルカの姿が見えない。それにクオンでもある。どこに行ったか、予想できる場所を探したがリルカは温泉にいたり、それ以外はわからずじまいだ。諦めて先程までヘスティアとオセロをやっていたのだが、時間を潰しても格納庫から上がってくることはない。

「探すか」

もう一度格納庫内を探すことにする。義体は【甲冑型】を試してみたいし、たまには高周波ブレード以外の武器も使いたい。何故だか換装もできないまま時間が過ぎていく。それだけ忙しいということだろうが、そのせいでスティアスの更新もついさつき思い出したのだ。

そうしてエレベーターに乗って地下に移動する。着くとオーグメントモードの使用でベル達の存在を探る。格納庫はビルでいうと高さは四階程度、最新鋭の上、魔力と恩恵による保護を得ているこの義体ならば降りることは難しいことではない。

磨かれた鉄製の手すりを乗り越えたと数秒後に金属と金属のぶち当たる音が音が格納庫内に響く。

当然、跳ぶときもオーグメントモードは起動している。

「高機能が過ぎないか、この基地」

オーグメントモードが一切通じない。扉一枚隔てただけでも効力が無くなってしまう。都市ならばそんなもの関係なく範囲内ならばいくらかでも熱源を探知できる。

「あ、アリス。遅くなってごめん」

「ああ、ベル。どこに行っていたんだ？」

「まあ、クオンさんに連れられて。男のロマンを教えられに。あ、断つたよ」

「男のロマン、ねえ。リリルカは風呂か？」

男のロマン、つまり覗きだろうか。ならば誰かが入っていると思われる、それがリリルカであればさらに合点がいく。クオンがそんなことをするのは意外であったが、そうかアイツも同類か。

「そうみたいです。待っておきます？」

「そうしよう」

丁寧に磨かれた机とフカフカの椅子。そういうものが用意されている休憩所的な場所。その場所は温泉に行く移動式の足場の近くに設置されている。

第19話

リリルカは長風呂であるようだ。その間にベルと和平が何をやっていたかというと、遊んでいた。和平の魔法で色々と出したり、戻したりで楽しむ。

「これは？」

「メタルギアMk—IIIだよ」

和平の膝くらいまでの高さで頭のような場所はカメラのレンズのようにつ目、胴体には手を広げるように映像を投影できる画面が、手作業ができるようにチューブが伸びるようになっていて。移動方法はホバー移動などである。遠隔操作が主な運用方法で、偵察に使えるものだ。あと、仕草が可愛い。現在は和平の操作で動いている。

「偵察にも使える優れたものだ。つまりはダンジョンでも使える時はあるだろう」

こういうものはリリルカのような戦闘能力のない支援職のものが使えるとなおよい。色々と気を配ることが多くなるだろうが支援だけでなく索敵、偵察が行えると助かる。潜入時にもサポート端末として同行できると使えると通信での支援の他にも役立つことは大いにある。

「おお、なんか可愛いですね」

「君もそう思うか。そう、Mk—IIIは可愛い上に高性能。完璧な非戦闘型の兵器だよ」

一応、メタルギアという名前が入っている以上は兵器の枠組みには入っている。こういう非戦闘型の兵器というものは結構ある。殺傷性をもたない【仔月光〈トライポッド〉】もそれにはいるだろう。国際法の縛りもあってそんな兵器はかなりの数製造されて廃棄されてきた。

シャー、という音と共に走りまわるMk—IIIの姿は妙に可愛い見える。たまにシユルル、と出すチューブのような腕も同じくで可愛い。凄く可愛い。

『いえーい』

「っ！喋りましたよ！」

「おっ、成功したな」

ベルはますますMk—IIIに愛着が湧いたようである。和平の声であるのだがそれには気づいていないようだ。

「なにやってんの？」

「あ、クオンさん」

「それにリルカも、その眼帯何だ？」

リルカの見えた目は服装がメイド服であること以外に変わった点が右目に眼帯のようなものが付けられている。

「あ、確かに」

ベルも気づいたようだ。クオンがリルカにあげたものであろう、恐らくは高性能眼帯だと思われる。

「私が与えたっ！」

「うう、なんか慣れませんか」

胸を張るクオンとしきりに眼帯を触るリルカ。多分、リルカの前にはいつも和平が見ているものと同じARが展開されているだろう。最初の頃は気持ち悪かったものである、結局は慣れだ。

「リルカも来たことだ、ダンジョンに行くとするか？」

「そうだね、リリ」

「あ、少し待ってくれ」

「え？」

ベルの言葉が阻まれて、ベルは首をかしげる。さっさと行こうとMk—IIIを、消してブレードの点検をしている和平にクオンは目をやる。

「スマンがアリスに用があるんだ、今日のところは二人で行ってきてくれ」

「……大丈夫なのか？」

正直まだリルカを信用しきっていない。あの眼帯に色々と仕掛けてはいるようだがそれでもまだ、である。

「色々と教えこんだから大丈夫だよ。あれ介して通信もできるぞ」

「ならいいのか？まあ一旦お前を信じよう」

とんだ高性能な物品のようである。クオンは果たしてこの世界に
いていい存在なのか甚だ疑問だ。

「まあ、ということらしい。すまないな」

「いや、用事があるなら強制はできませんから」

「リリルカ。その眼帯、使い方わかるよな」

「説明は受けましたけど、なんなんですか？これ」

「これはだな」

「クオン、専門的な話をしても分からないが加速するだけだ」

「まあ、そうなるか」

ARがなんちゃらとかMRがなんちゃらだとか今でも和平にはよく分かっていない。使えるから使っている、つまりは本当に慣れなのだ。科学者ならば別だがリリルカも和平も現場で働いている。

「まあダンジョンで使ってみろ。着いたら分かるから、用が終わったら通信する」

「まあ、はいい？」

「よく分かんないから気にしない方がいいよ」

「ええ、ええ？」

ベルは幼い時からのクオンの奇行や凶行を思い出して今の二人の会話を重ねる。そういえば祖父ともそんな会話をしていたっけ。

「苦労話を聞かせてあげよう」

「いや、それはもうお腹いっぱいですよ」

和平とクオンの話が深いところに達すると二人の声は完全に聞こえなくなる。そうなる二人は諦めて地上に向かう。これを機に二人の仲は結構良くなることは別の話だろう。

「それで、用事とはなんだ？」

「新しい義体と【仕事】だよ」

「【仕事】？」

「ああ【冒険者依頼】じゃないのは文句言うなよ」

【冒険者依頼〈クエスト〉】とは【ファミリア】や商会からの冒険者に対する依頼のこと。受けるものは吟味しなくてはならないものもあるので注意が必要であるがクオンは信用できる。しかし、それではな

いとなるとどのようなものなのだろうか。

「信用できるのか？」

「当然。私たちとは利害が一致しているし、裏切ることには有り得ん」
クオンがここまで言うのなら信用はできるのだろうがそれでも不安は残る。そんな不安も自信満々のクオンの顔に塗りつぶされる。

「ここは、最高機密の部屋ではないか？」

「だから、密談の場にピッタリなんだ。セキュリティクリアランスは最高だからな」

暗い。そして目の前には大きい画面とキーボード、そして一人用の椅子。クオンがそれに座って和平はそれを寄りかかる。

クオンは慣れた様子で目の前のよく分からない機械を操作する。専門的なものだろうし、説明を受けたら訳が分からなくなるだろう。クオンも科学者気質であるので説明を求めたらとんでもなく長くなるだろう。

「よし、通信開始っと」

ポチッとクオンが最後にボタンを押す。すると節操なく画面が切り替わっていたのが画面が固定されて映像が映される。

その先には白髪の老人の姿が映された。

「ウラノス、聞こえるか？」

『ああ、聞こえる』

クオンが老人、いや老神というべきだろうか。その名前を聞いた途端、和平は吹き出しかける。ウラノス、その名前は「ギルド」を統括する神の名前だ。このオラリオのトップといっても過言ではないだろう。

「前頼んできた依頼、受けるぞ」

『そうか、助かる』

「ああ、フェルズはいるか？いるなら変わってくれ」

『もうすぐ戻ってくるはずだ。待っていてくれ』

「りよーかいだ。アリス、コイツがウラノス。今回の依頼人〈クライアント〉だ」

『アリス。よろしく頼む』

「あ、ああ。こちらこそな」

「なんだ、緊張してるのか？」

「こんな神とは想像つかないだろう」

ますますクオンの人脈が分からなくなる。いくつものファミリアと連携しての義手の制作、ベルの腕の【魔力起動式手甲】や技術である【魔力応用術】の練度。恩恵を受けていないのに和平を大きく上回る戦闘力、本当に何者か分からない。基本スペックが高すぎる上、自分からは積極的に干渉しようとせず協力に留めている。

「そうかそうか。通信先にここも加えようか。大丈夫か？」

『問題ない』

「おーけー」

A R画面に更新のお知らせが出てくる。それに通信の画面にフェルズとウラノスが追加されていることを確認する。

「エラーはないか？」

「うん、表記は同じだ。大丈夫だな」

「よし、それならいいな」

ウラノスも和平も、そしてクオンも話さない束の間の沈黙の時間が続く。室内にはカタカタとキーボードを叩く音だけが響く。

『…通信がきてるのか』

『ああ、依頼を受けるそうだ』

『それはありがたい』

画面の向こうで新しい声が聞こえる。恐らく、その声を出している人がフェルズなのだろう。重い瞼を何とかして開けると画面に目を向ける。

「フェルズ」

『クオン、ありがたいよ。それでその、アリスくんが向かってくれるのか？』

「ああ、そうだよ。そのはずだ」

「はあ、受けるよ。当然だが私一人ではないのだろうか？」

返答を聞かずに依頼を受けているクオンにため息をつくが身内には過保護になるクオンである。和平でもクリアはできると見込んで

のことだろう。

「もちろん。ウルフを同行させるし、フェルズもどこかに依頼しているはずだ」

『そうだな〔ヘルメス・ファミリア〕に依頼しておいた。それに〔劍姫〕にも声をかけるつもりだ』

「アイズにか？私から声をかけてもいいぞ」

『君と私たちの関係が気取られるのは避けたい』

「おお、了解。いつだ？」

『それはだな……』

日時や場所などの細かい情報を教えてもらい、忘れないようにデータにそれを記録する。

「よし、OKだ」

『やはりこれは便利だな、しかし』

「教えてやろうかっていつも言ってるだろう。未知に対して慎重になりすぎだ。これは先人の技術だしな」

『それでもだな、やはり忌避感というものがあって』

「もういい。明日にでもそっち行って叩き込んでやる」

『ありがたいが、遠慮したいな……！』

「……おい」

フェルズとクオンの話が盛り上がっていて入り込めそうにない。やはり有識者同士の話とは長引くものなのだな、と再確認したような反応を零すと大人しく待つことにした。

中層で力を示す

この世界では裏切りなどは起こらない。だからこそ転機が必要なのだった。しかしながらそれはベルによって行われたものではなく、アリスの手によって行われたことであつた。和平のことではなく、不死の方でありその者の手によって行われたのは【ソーマ・ファミリア】の皆殺し。その手法は常に暗殺であつた。殺しの相手以外に姿を見せることも無くアリスがやったことを知っているのはソーマとクオンくらいのものであつた。それによってソーマが行つたのはこじんまりとした酒店の経営、店番は生き残りの、酒ではなく神としてのソーマ自身を慕ってくれる眷属がやっている。元々の本拠は売り払つて新しい本拠を購入している。リリルカもそれをたまに手伝う様子であつた。そこまで大きなことが進んでいる時、ちょうど和平のクエストに出かける時であつた。

彼女にとつて、使命は大きな意味を持つ。生前は親たるアリスや家族を守り抜くことを使命とし、今でも家族を守ることを使命としている。彼女は自分では自分に生きる意味を見いだせない。何故なら自分は無価値だと思つているからだ。それどころか死んだ方がいいとすら思つている。そんな彼女が必要とされて断る道理は絶対がない。【甲冑型】の義体もまた取り回しが良い。【人甲型】より体積は確実に多く【高周波ブレード】は従来のものより大きくなっていて何時でも【人斬り鋏≪ブラッドラスト≫】は取り出せるようになっていて。【デスペラード社】の首領である【サンダウナー】の義体が元となつていらしい。装備している黒コートは前と大きさが違うだけである。バイザーは当然、口にも呼吸の補佐用に展開されるようになっていて。結果的に肌色が見えるのは額と鼻だけになる。【甲冑型】でも【人甲型】や【人体型】よりも動きにくいことは確実であるが走ることも壁を駆け昇ることも可能だ。一応であるが【闇の衣】の中に爆発反応装甲もシールドとして搭載している。【人斬り鋏】はさすがに衣の外に露出させている。それに背中にも【高周波ブレード】として背中に大剣を背負っている。小さい体躯なのに【自動修復ナノペースト】や【電

解液パック」、「ハイポーション」が入っているバックパックを腰に下げている。

ダンジョン十八階層とは安全階層《セーフティポイント》であり「迷宮の楽園《アンダーリゾート》」と呼ばれる階層である。中層に到達した冒険者にとつては水晶で埋め尽くされた擬似的な天井が、森や島とも見間違える大岩があり、正しく中層に到達した冒険者にのみ許された楽園。

そんな場所に第一級冒険者である彼女が降り立つ。「冒険者依頼《クエスト》」のためにこの階層にある「リヴィラの街」に向かって歩いている。彼女の正体は主神の趣味が現れた銀の装甲と腰の細剣《デスペレート》が表しているだろう。金色の髪をたなびかせている彼女の名はアイズ・ヴァレンシユタイン。

（ベルとのお話、何を話せばいいんだろう）

彼女は自分が話し下手であることを理解している。彼女はベルに興味があるのだ、最初の邂逅はミノタウロスを逃がしてしまった時、そして酒場でのこと。自分に「冒険者依頼」を頼んできた黒衣の人物とクオンの口から出た交換条件がそれであったのだ。クオンとは個人的な親交があり、アイズは彼女のことを信頼している。だからこそ、この依頼を受けた。

ベルの強さの秘密を知りたかった。その答えを知ることができると高揚感が隠せていないのである。ベルにクオンが関わっているのを知ってそれに関しても知りたいのである。そしてベルに関わりがある黒衣の幼女、名前は知らないが酒場でのことで気になってはいるのだ。

そんな高揚感を振り払おうと頭を振る。その後少し息をついて目的地である「黄金の穴蔵亭」を目指す。冒険者の運営している街であるから入り組んでいるがそれでもしつかりと目的地にたどり着く。そこに入るとすぐ前に出会った「犬人《シアンスロープ》」とまた出会い「じゃが丸くん抹茶クリーム味」の合言葉を言うと店内にいる冒険者全員が今回の協力者であることが分かる。

それからは協力者である「ヘルメス・ファミリア」の団長である「ア

スファイ・アル・アンドロメダ」と情報交換を簡単にする。

二十四階層にて起こっているモンスターの大量発生の調査。その発端を調査し、可能ならばその原因を排除する。というのが内容であったのだ。それに関してアイズが知っていることは数少ない、黒衣の人物が何故アイズを選んだのかは彼女自身にもわかることではなかった。

それから一度補給に出ようとしたところで大人のルルネ・ルイーから待たがかる。彼女によれば援軍は二人であるのだという、アイズは一人で来たと答えるとおかしいなあ、という反応を示した。アスフィの判断は補給に出た後、一度戻っていなかったらそのまま出発するというものであった。アイズ以上か同格の援軍は期待できないとは彼女の見解である。そんな時である、入口の扉が開き、一同は席に着く。アイズはルルネに急かされて席につく。

その扉を開けた酒場の客は黒衣を着た面妖な【小人族】であった。妙に身体が太く、腰には大剣を二本下げていて背中にも一本、大剣がある。そんな普通ならば動くこともままならないであろう格好で妙に軽快に酒場のマスターの元に足を動かしてこう言った。

「じゃが丸くん抹茶クリーム味」

その声は女性のものであった。子供の高さでないため種族は【小人族】であると確定される。そして【協力者】であることも合言葉から確定される。

「……へっ？あんたが【協力者】？」

声を擦りだしたのはルルネであった。過剰装備で歩けるのは確認したが役に立ちそうにないというのは酒場にいる【ヘルメス・ファミリア】の共通認識であったがアイズはその小人に何か親近感を覚えた。なぜかはわからない、同じファミリアではないだろうし、と疑問に思うがすぐに答えは出た。自分と同じクオンに色々習った人だと。「そうだな、その腑抜けた顔は傑作だ」

声に変調はなく、ククク、という声のみが聞こえた。それをバカにされたと認識した冒険者は殺気立つ。それを一瞥してふむ、と依然変わらない声を出すとアスフィに声をかける。

「君たちが【ヘルメス・ファミリア】、今回の協力者かな？」

「……はい。どうやらそのようですね」

アスファイが周囲を一瞥すると団員たちの殺気が止まる。凄いな、と和平が軽く呟くのをアスファイは無視して話を進める。

「私はアスファイ・アル・アンドロメダ。そちらの【剣姫】を除いた十四名が【ヘルメス・ファミリア】となっています。……情報交換は後にするとして、あなたの名前と所属をお聞かせ願えますか？」

正直、こんな人材は望んでいないとアスファイは疲れきったように席を立って和平に自己紹介を求める。

和平の見た目は確かに役に立つようには見えないだろう。背中に背負った大剣と腰に下げた二つの大剣、バックパックは少し大きい方である。そして体躯は一般的な小人族よりも小さく、とても動けるようには思えない格好である。

「紫桜 和平、気軽にアリスと呼んでくれたまえ。所属は【ヘステイア・ファミリア】だよ」

アイズはその名前に聞き覚えがあつた。しかしながらオラリオに知られている名前ではないし、ランクアップもしている訳もないため【二つ名】は存在しない。

知識に縫ったものの何も情報がヒットしなかったため、不安になっているアスファイたちをよそに和平はアイズを眺める。

リリルカ改造計画

和平が出かけてから、今日の探索はリリルカの都合を顧みて前には時間の都合でできなかった相談をしている。アリスによって皆殺しになった【ソーマ・ファミリア】のただ二人の生存者、彼女は自由を手に入れている。彼女自身はクオンの仕様だと思っているがクオンはそんなこと、気にも留めていない。リリルカにはもう洗脳はしていない。鍛錬そのものは引き続きしているがそれそのものには彼女は忌避感をもっていない。方法はどうかであれ【恩人】であることには変わりない故に。

「【サイボーグ化】？」

「ああ、腕だけだがな。メリットとデメリットだが……」

腕のサイボーグ化、つまりは義手にするということである。いつでも腕は取り戻せるようにするようになる。これは実験のようなものである。腕は人工血液によって維持することは可能になっているかどうか、義手の耐久度はベルによって証明されているはずなのと、腕の機能である。通信やパワーアシスト等、様々な機能がある。クオンはどうにバイトを辞めており【ヘスティア・ファミリア】の本拠である【格納庫】にてベルや和平のサポートをしている。その中で開発していた【魔力起動式手甲】やそのいいところ取りしたサイボーグ型の義手や耐久に特化した義手。その二つとも【ディアンケヒト・ファミリア】が開発している【銀の腕】より高性能なものになっている。

「……腕、ですか」

「駄目ならそれでいい」

手甲型にするとまだ無駄に大きくなってしまふ。義手にすると壊れた時に代わりがあるのも大きなメリットとなるだろう。かさばる問題もリリルカの大きなバックパックならばそれは解決できる。それにリリルカのスキルである【縁下力持】と義手のパワーアシストによつて超重武器の扱いもできるようになるだろう。リリルカにおしえた【魔力応用術】の【基本型】でも身体能力の強化が可能だ。正直、スキル自体は【小人族】である彼女には合っていないと思うが、ある

ものは使っておくべきであろう。

そんな内容をリリルカに話す。手甲では無理であると遠回しに言われた彼女の顔は始終暗かった。腕をなくして義手にする、というのはやはり忌避感があるのだろう。そんな感情は理解はできるものの、共感はできない。そんなことを思った昔の時代、そんなことはもうクオンの記憶にはないし死への忌避感などはとうの昔に捨てている。必要があれば足でも腕でも首でさえクオンは躊躇いなく切り落とすだろう。

「お願いします」

「よし分かった」

だからだろう、リリルカの決意の一言に対して間もなく引き受ける。それはリリルカの決意を揺るがせないためでもあっただろう。

「腕はどんな感じですか？」

「本物の腕に限りなく近づけている。隠しておいた方がいいだろうかもし見えてもいいようにはあるぞ」

「それはどこに？」

「この真下だよ。さっさと行ってしまおうか」

リリルカはクオンの後を追って階段を降りる。それから一つ目の扉の中に入ると中には見たこともない装置に真ん中には椅子があった。右腕と左腕が置かれるだろう場所には座る人からは見えないように腕を差し込むものだろう、鉄の筒のようなものがある。

「座ってくれ」

「ああ、はい」

座るにはどうしたらいいだろうか、そんなことを考えて機械的な椅子に座る。もうここに来てから機械類には見慣れたのもうこんな部屋には驚かない。筒のようなものに腕を通す。

「いたっ」

何の予告もなしにチクツとした痛みが右腕に走り、思わず言葉が漏れる。クオンからも謝罪の言葉が漏れた。

「うん、準備完了だ。義手、見せるな」

リリルカからは見えないがプシュー、という音が聞こえる。何かを取り出したことは想像に難くなく、それは義手なのだろう。

「これは、腕ですね。いや、でも」

「限りなく近づけていると言っただろう」

そこにあつたのは肌色の見慣れた腕であつた。しかし、肘ほどまでしかないそれはリリルカにとって違和感を放っていた。関節まではない腕の接合部だけは金属っぽい印象を受けるものだ。

「よーし、いいな？やるぞ」

「大丈夫です」

右腕の鉄の筒の上。そこにクオンは義手をセットする。そうすると近くの装置を操作して作業を開始させるようだ。椅子は駆動音をたてて起動する。痛みには耐えようと歯を食いしばろうとするがそんな時は訪れなかった。痛みは全くなく、気づいた頃には終了のアナウンスだろうか、そんなものが椅子から聞こえてくる。すると鉄の筒がプシュー、という音と共に縦に割れた。そこから見えるのは切れて保存状態にされている自分の腕もくつつけられた義手。

「よしっ、成功。戻したい時はいつでも言ってくれな」

「ああ、はい」

なんか物足りない、そんなことを思ってしまった。痛みがないのは最高だ、うん。しかし、覚悟していたのにそれが現れないのは残念なことなのである。

「次は性能テストだな、トレーニングルームに行ってくれ。私は必要なものとしてくる」

「分かりました。って性能テスト、いない」

性能テスト、これが初めてなのだろうか。そんなことを突っ込む暇もなくクオンは部屋を出ていく。ムズムズしたものを感じるがそれはそれとして腕がちゃんと動くことを確認しながらトレーニングルームに向かう。

確かに腕はこれまでより力が入れやすい、というより別のよう感じる。これならば片腕だけでも今まで搾取してくれた奴らをぶん殴れそうである。

「いるな。リリ、これを受け取れ」

プシュー、という音と共にクオンが現れる。クオンの手にはクオンやリルカの身長より見るからに大きい槌を持っている。クオンはそれを放り投げるが当然、リルカはそれを受け取れず、それは相応の重さの音を立てて地面に落ちる。

「どうした？持てるだろ」

「いや、さすがにこれは……」

「持てるはずだ。スキル【縁下力持】だったよな、それも加味すれば余裕よ、よゆう」

「そう、ですかねえ？」

クオンの発言に疑問は持つものの、何故かそれに抗えないような感じがしてリルカはその大槌を手取る。当然、右腕から持つが重いように感じる。感じるが、なんの違和感もなく両手持ちで大槌を持てた。

「やっぱりな。どうだ？キツいか」

「いえ、そんなには。ですが」

「振るのは少しキツいか。それは教えてやろう」

クオンがささっと端末で操作すると二人の周りがまるっと変わる。どこか大きい建物の屋上だろうか、リルカは見たことのない景色である。雲が間近に見える。

「よーし、そういうえば授業は一回だけだったな。再開といこう」

「……う？よく分かりませんが、そういうことなら遠慮なくっ！」

目の前の少女が死ぬ姿など想像できない。だからこそ、リルカは殺す気で槌を振りかざす。